碧眼の情報屋

暁 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
碧眼の情報屋

【Ｎコード】
Ｎ９４８１Ｌ

【作者名】
暁　黎

【あらすじ】
１０年程前、裏社会に突然現れた情報屋。今では碧眼の情報屋と言えば、裏社会では知らぬものはいないと言われるほどである。しかしあまり仕事を請け負わないことも有名で、情報屋がいったい誰なのかなど様々なことが分っていない。そんな情報屋の苦労話・・・・

始まり～前編～（前書き）

以外に長くなったので、２つに分けました。

始まり～前編～

“赤い部屋”今のこの部屋を表すとすればこれが一番だろう。
なぜならこの部屋の壁という壁が赤く血で染り、かつて人だったものが転がっているからだ。
つい数時間前までは普通の、いや普通ではないか。無機質で物がなにも無い“白い部屋”だった。

…なぜこのような惨状になったのかって？
それを説明するためには僕という“存在”とそこに転がっている“人（モノ）”との関係を説明しなくてはならない。
少し長くなるかもしれないけど、それでもいいなら聞いて欲しい・・・。

～僕が生まれた日～

ｓｉｄｅ？？？

「～～～！　～～～！」

…だれ？
…なに？
僕は無意識に声を出そうして息を吸った。

「っ！」

喉に何が入ってきて息が出来ない。喉からそれを出そうとするが、

それは周りに満ちているらしく意味がなかった。
そして何が音がした。っと思ったら、下に流されるような感じがした後僕は意思を失った。

ｓｉｄｅ???

どれほどこの時を待ったことか！やっと長年の願いが叶う！
私の前には、カプセルの中に入っている少女がいる。今まで何体もの失敗作が出来た。しかし！この少女は違う！　この私が長年の研究成果！　成功体だ！

「フフフフフッハハハハ！」

ああ、少し興奮してしてしまったみたいだ。中の少女を外に出さなくてわな。溺れさすわけにはいかないからな。
私は機械を操作しカプセルの下を開けた。培養液と一緒に少女が床に流されきた。
綺麗に拭いてやり服を着させてやった。

……フフフフフ。

私の願いが叶うと思うと自然に笑みがこぼれてくる。
後もう少しだ……。

ｓｉｄｅ少女

「…まぶしい」

目が覚めると、目に強烈な光が入ってきた。
眩しくて目が少し痛かった。目に涙が出てきた。それでも頑張って目を開ようとしていると、すぐ傍で音がした。

「まだ生まれたばかりで、目が慣れていないだろうから無理に目を開けるな。目が見えなくなる」

知らない男がそう言った。目は見えないが、声が男性のものだったので、男であっているだろう。
しかし、よく意味が分からない。

生まれたばかり？　目が覚めてから気になっていた僕に記憶がない事と関係あるのだろうか？　それにさっきから変な感覚がする。僕は見たことも聞いたことの無いのに、それが何なのか“解る”のである。例えばさっきの「涙」である。僕には記憶というものが無い。だからそれが何なのか解らないはずなのに“解る”のである。これは「涙」だと自分の中から知識が浮かんでくるのである。「まぶしい」と僕は目が覚めてから言ったが、こういう状態・感情の時は「まぶしい」と言うんだと無意識に自分の中にある知識の中から探し呟いていたのである。

「貴方はだれ？生まれたてってどういう意味ですか？」

「まず、私のことか。私のことは創造主と呼べ。そして二番目の質問だが、それはそのままの意味だ」

……微妙に会話が成立してない気がするのは気のせいだろうか？
まぁいいか。

「？　もっと詳しく教えて欲しいのですが」

「そうだな、最初から知っていた方がいいだろう教えてやる」

～数十分後～

この男の話をまとめてみた。

・自分は人工的に造られた人間らしい。

・この男には願い（目的）があるらしく、そのために僕を造った。

・知識がないと色々面倒なので、造る時に知識を僕の中に入れた。

これなら僕が記憶がなことと、知識があることが納得できる。というより自分自身、普通の人間じゃないような気がしていたのだ。

まぁこの男の願い（目的）を知ることが第一だね。男の願い（目的）が気に入らなかったら、どうにかすればいいか。最悪の場合殺そう。

え？創造主なのにいいのかって？

創造主だから、しばらく様子をみてからにしよう。って思ったんだよ？創造主じゃなかったら殺して逃げてたよ。なんでか分からないけど、殺し方の知識もあるんだよね。

怨むならこんな風に造った自分自身を怨んでください！

性格変わってる？

いやいや。変わってないよ。ただ時間が経つごとに感情がでてくるんだよね。どんどん自我が出来てくるのが分かるんだよ。

～今後の方針～

気長に創造主のことを、探っていこう。
もちろん、なるべくいい子にしてね。頑張って猫をかぶるよ。

始まり～後編～

～一年後～

ｓｉｄｅ少女

え？　以外と時間が経ってる？
そんなたいしたことしてなかったからね。
何してたかって？

まず、自分の中にある知識の把握をしたよ。それでその知識にあるものを実際に見たり聞いたりしてだんだ。やっぱり実際に見たりして体験するのとしないのとは、全然違ったからね。
あとは、あの男に目的をしつこく聞いたりしたよ。でも全然教えてくれないんだよね。

ハァ～。ため息だってつきたくなるよ。

しかし！　ここで諦める僕ではないのだ！

この間勝手に、あの男の部屋に忍び込んで資料をあさったんだよ。
僕のいる部屋には本当に何も無いからね。無機質で、物が何もないんだ。だからこんな泥棒みたいな真似をしないと、何も分からないんだ。
話がそれたね。

その資料に面白いことが書いてあったんだ！　その名も〈念〉！

調べてみると、すっごい便利な能力だとわかった。

基礎は男にばれないようにコソコソ練習して、できるようになった。
僕は今、結構焦っている。
なんだか嫌な予感がするんだよね……。

ｓｉｄｅ創造主

一年が経った。
自分で創ってなんだが、あの少女はとても優秀だ。
そして優秀だからこそ私の目的を知るかもしれない。そうしたら必ず逃げるだろう。
そんなことが有ってはならない！

なので私は計画を実行することにした。
計画内容の確認をしておかなければならないか。まぁ確認も何も無いのだかな。私の念能力『憑依』を使うだけだ。この能力は相手の精神を壊し、相手の体を乗っとれる。だが、一度完全に乗っとったら二度と元の体に戻れない。しかし私にとって、この体はゴミ。要らないものだ。
計画を実行する！

「…ッフフフフフ！」

やっと私の願いが叶うのだ！

ｓｉｄｅ少女

「入る」

いつもはこんなに早く来ないのに！

「！」

ずっと僕の前では無表情だった男が笑っていた。とても嬉しそうに、そして狂ったように。

無意識に体が逃げようとした。

ガッ！！

頭を掴まれ、逃げ道をふさがれた。

そして、生まれて初めて死を感じた。

殺される！

僕の中で何かが弾けた……。

……そのあと何をしたのかよく覚えていない。覚えているのは、男の悲鳴と殺した感触だけだった。

……sideout

……これが今僕が“赤い部屋”に居る経緯。

一歩

「いつまでも此処にいる訳にはいかないよね」

そう自分に言い聞かせるように呟き、座り込んでいた足を立たせようとする。

「っ！」

力が入らない。見てみれば体が震えていた。

何故自分の体が震えているのか解らなかった。創られてこのかた、こんな風になったことはなかったのに何故……？

自分の中にある知識から検索し、該当するものを探す。……心理的な問題？

心理的ということは心の問題ということか……。

それを知って場違いなことに僕は、創られた僕にも心ってあったんだな。そう思った。

何を持ってして心とするのかはよくは解らないが、この状況になって僕にも心があったのだと歓喜する。

生みの親である人間を殺してその事実に何も感じずに、何も感じないが故に恐怖している僕にも心があったのかと、その恐怖が心がある証拠なのだと歓喜する。

「あははは……」

狂ってる。そう思った。思ったら何故か笑えてきて、涙が止ま

らなくなる。
何故……？
何故僕は泣いているのだろう？
何が可笑しくて笑っているのだろう？

解らない。
分からない。

あぁ、でもしょうがないか。
僕は創られたもので、代用品で、狂っているのだから……

……しょうがない。

気付いたもの、気付きたくないものを心の中に沈めていく。
涙を止めるために、笑うために。
泣いている時より、笑っている時の方が心が軽くなるから嬉しくなるから、僕は笑おう。
いつかこの心の中にある重くて硬いものも軽く溶けて消えるように、祈りながら、願いながら、僕は笑う。

＊　＊　＊

ふと気付くと周りは真っ暗で慌てて部屋を出ようとする。
立ち上がり歩き出そうとすると視界の端に創造主だったものが映った。
立ち止り胴体から離された生首に近づいていく。その表情は驚愕し目が開いたままだった。
手をかざし瞼を下ろさせる。顔だけ見れば寝ているようにも見え

なくもない。

最後にこれぐらいは言わないとね。

「創造主、貴方のことは好きじゃなかったけど僕を創ってくれたことには感謝している。お休みなさい」

そして僕はこの部屋を後にした。

此処にはもう居る意味はないな。研究所を見渡しながらそう思う。荷物をまとめたら出ていこう。

まずやることは、あの男の通帳とまだ読んでいない“僕”についての資料をさがさないと。

バサバサッ！　バキッガタガタッ！……

ふぅ、見つかった。

それにしてもあんなところに金庫が在るなんて、しかも念能力を使って思いっきり殴らないと壊れないくらい頑丈な金庫。

もちろん殴って壊したけど、何が入ってるいるんだろう。

どれどれ……通帳とハンターライセンスがあった。あの男ハンターだったんだね。

後、他に何か無いかな……何でこんなところにこんな物が入ってるんだ？

日記。どこからどう見ても日記。表紙にも『日記』て書いてあるから間違いない。
全く予想して無かったよ。てか、何で金庫の中？　そんなに恥ずかしかったのか？

まぁいいか！　きっと何か大事なことでも書いてあるんだよね！
うん。そうだよね……？

～十分後～

荷造り完了！って行っても僕の持ち物なんて、服の数枚しかないんだよね。
それにさっき金庫から出した通帳・ハンターライセンス・日記を入れるだけ。だからずぐ終わった。

コトッコトッ……。

僕は今ある場所に向かって歩いく。

コトッコトッ……。

……ついた。

目の前には、扉がある。僕はこの扉に向かっていたのだ。
外の世界に通じる扉の前に。

僕は生まれてから一度も外に出たことが無い。

初めての外。
知識でしか知らない、僕にとっは未知の世界だ。僕は期待と少しの緊張をしながら扉を開けた。

ギィィ。

夜の闇が体を包み込み、日の出の光が体を照らした。

僕は光に向かって、外に初めての一歩を踏み出した。

故郷

……あれから数日がたった。

僕があそこから出て外にあったのは“死んでもいないが、生きてもいない場所”だった。

僕は違法であろう実験をしていたんだんだから、何にも無いような場所なんだろうなぁっと思っていた。だからまず周りに人が普通に居たことに驚いた。

でもしばらく見て回ったら、あいつが此処にいて平気だったのか納得した。

此処にいる人達はなんだか生気が薄い、普通に死体とかが転がってた時は驚いたね。なんて言うか他人をかまってられないっ感じだ。

“悲しい街”そんな感想を持った。

「此処が僕の故郷ってことになるのかな？」

ある意味人外の僕には此処は合っているかもしれない。

……後に知ったこの街の名前は“流星街（りゅうせいがい）”捨てられたもの達が集う街、全てを受け入れる場所。

そう聞いた時、物凄く納得した。あの場所は、まさにそいう場所だった。少しの間しか居なかったけど、あの場所はそれぐらい強烈に頭に残ったのだ。

好きではないけれど、嫌いになれない場所そこが僕の故郷。

故郷（後書き）

今回は特に短くなってしまいました。

次話は、創造主の目的を載せるつもりです。

僕の創られた理由

「ふぅ～。疲れた～」

ボスッと音をたててベットに倒れこんだ。

「本当に疲れた…。こんなに流星街から出るのが大変だったなんて…！」

枕に埋めていた顔を勢いよくあげた。

「何であんなに高いゴミの山があるわけ！しかもきちんと積んだわけでも大きさを揃えている訳でもないから

進み難いし、気を抜いたら崩れそうになるし！崖はあるは森はあるは・・・ｅｃｔ」

はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……。

ろくに息継ぎをしなかったせいか全力で走った時みたいに息が上がっている。

ちっ！　こんなことなら流星街を出る前に念能力を創っておけばよかった。

疲れてイライラする…。

念を使える僕でこんなになっているんだから普通の念が使えないやつだったらでれないだろ。

ああ、だからあんなところにみんないたのか。実力がないと外に出れない街だったわけか。

「気分を変えるためにあの金庫の中に入っていた日記を読もう！」

でもな～んかこれを読んだら嫌な気分になりそうな気がビシッバシッ感じるんだけど。

「でも、読まなきゃ始まらないよね！」

ガサゴソ

「っあ！　あった、あった！　これこれ」

「え～と、なになに？＊＊＊＊年○月○日…

『　　＊＊＊＊年○月○日

俺は今日１６歳になった。

この世界に転生してもう１６年もの時間がたったようだ。前の世界では１４歳だったからもうこっちの方が長く居ることになるな。とても不思議な感じだ。

だが、生まれつき身体が悪いらしくて病院から出たことが無い。でもここには念がある。だから早くそれを習得して、原作をブレイクしてやるんだ！

・

・　・

・　・

・『」」

「なにこれ？転生？」

ナニコレ？
待て待て落ち着くんだ僕。
……落ち着いた。かな？
これに書いてある“転生”って言うのが本当だと仮定する。
きっと多分本当なんだろう。いや私には判断できないが、本人は転生したと本気で思っていたんだろう。でなければ、金庫に日記なんて入れないだろうからね。
……でもそう転生ねぇ。
ところどころに分からない言葉や言い回しがあるんだけど原作ブレイクってなに？

パラパラと数十ページ程見ていく。
どうやらこの時はまだ狂っていないらしい。普通の少年って感じがする。
どうしてこれがああなったんだ？

『今日、母親と先生が話しているのが聞こえた。
俺はもう治らないらしい。もって1年だそうだ。
……変だと思ったんだよ。いきなり退院だって言うから、最後は家でってか？
余計なお世話だよ！！　誰が死ぬもんか！！！　念を覚えてやる！
そうすれば、多少の時間稼ぎになるはずだ！　それで念でこの身体をどうにかしてやる！
死んでやるもんか！　たとえ誰かを殺したとしても生きてやる！！！！　……』

……これか。
これがやつが狂ったばかりの時か。
その後周りの同情の目に耐え切れず、家族や友人を殺し……その後自由に動けるようにするためにハンターライセンスを取ったらしい。
念を覚えて余命は伸びたがそれでは足りないらしく、念能力『憑依』を創ったみたいだ。
……僕にしようとしたのはこれだな。相手の精神を壊しその相手の体を乗っ取るものだったらしい。
よかった抵抗して。今更あいつがやろうとしていたことをしって、ちょっと寒気を感じた。
僕を創った理由はどうせなら強い肉体・強い念能力を使える身体がよかったらしい。
男のもう一つの目的の原作ブレイクと言うのが解らない。…調べてみるか。
〜調べ中〜
「この世界が漫画の世界……」
僕は呆然とし、ふつふつと怒りが沸いてきた。
「お前の世界でこの世界のことが描かれていたと言うならそうな

んだろう。しかし、お前を許せるほどお人好しじゃない！」

別にあいつの世界で漫画に描かれていたから僕は怒っているんじゃない！

「お前はここをこの世界を漫画の世界といい、この世界を軽んじていたから僕は許せないんだ！　お前をあの時あっさり殺したことを、今初めて後悔したよ！！　この世界はお前たちの世界から見たら漫画の世界なんだろう。でも、僕は！　僕はここで確かに生きているんだ！　それを僕の、僕らの命を軽んじることは絶対許さない！」

こいつの意見を認めてしまったら、僕の存在を否定することになる。僕は生きている。そう思えるようになった気持ち今まで感じてきた感情その全てが偽りになってしまう。僕は人形でも代用品でもない。僕は生きていて……狂っているけど、人間だ。人間でいたいのだ。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

近くにあったお茶を飲む。

「ふぅ」

まだ怒りは納まっていないけど、何とか落ち着いたにたいだ。

本当に最悪だ。あの男も今の気持ちも何もかも最悪だ。

悪い予感があたったな。

たぶん一生あいつのことは許せないだろうし、許す気も無い。

例えあいつが考えていたみたいに、イレギュラー（僕）の存在で違う結果（未来）になろうとそれは僕が決めて選んだ結果だ。あいつが選んだ結果ではないのだから。

僕は自分の道を歩いていこう。

……たとえどんな結果になろうとも。

主人公設定（前書き）

前の主人公設定を少し変えました。
特に容姿が変わった・・・。

主人公設定

●名前：ヒスイ
●性別：女
●身長：１５８
●体重：秘密だよ♪
●念の系統：特質系

＜容姿＞
蒼い髪に碧眼。
１０人中９人は可愛いと言うであろう容姿をしている。

＜念能力＞
『全てを知る本』
姿…白い本。中は白紙。
効果…知りたいことを頭の中で思い浮かべる（口に出してもいい）と、ページが開き文字が浮かんでくる。
制約…思い浮かべるものはなるべく簡潔にし、曖昧なものだと正しい情報は出てこない。
　知りたい情報に人が関連している場合、その関連している人より自分が強くなければならない。
　人の情報を知りたい場合、その人より自分が強くなければ情報は出てこない。

『全てを見る目』
姿…発動時碧眼だった目が、翠玉石（エメラルド）色に変わる。
効果…武器など物を見るとすぐにその使い方・体の動かし方が理解できる。そのためすぐに一流になれる。
視た動きもすぐに理解できる。（すぐ出来るようになる）

念能力を凝を使わなくても見ることができ、見ただけでその能力がどうゆうものか理解できる。

制約…特に無し

情報屋と暗殺者1

『ここ2年程前から裏社会ではある人物が有名になっている。その人物の名は“碧眼の情報屋”。

“情報屋”と言うその名の通り情報を売る仕事だ。

もちろん“表”ではなく“裏”の仕事。

“裏”では情報と言うものが何より大事だ。だから情報は高値で売り買いされる。

当然のことだかがこの仕事は信用が命だ。信用が無いものの情報を信じることができるだろうか？答えは“否”だ。信用が無いものの情報を信用などできないからだ。

この“信用”と言った点に関して言うなら“碧眼の情報屋”は成功したと言えるだろう。

“碧眼の情報屋”は一度受けた依頼の情報は必ず集めてくれること。そしてその情報は必ず合っているのである。未だ“碧眼の情報屋”が誤った情報を売ったことはない。それは信用するには十分すぎるものだった。

確かに“碧眼の情報屋”は信用できる情報屋とされている。……“信用できるが、変わっている情報屋”っとつくが。

“碧眼の情報屋”は変わっていて気分屋と言われている。

これは1年程前から依頼受ける件数が急激に激減されたことと、“碧眼の情報屋”っと言う名以外何も情報屋についての情報が無いことが理由だろう。なぜ依頼の件数が減ったのか、当時は結構な数の憶測が言われたが未だ理由は解っていない。

“碧眼の情報屋”は一度も誤った情報を売ったことは無い。どん

な情報も正しかった。ゆえに何時からかこう言われるようになった
「碧眼の情報屋はなんでも知っているのではないか」っと。
“碧眼の情報屋”は色々な意味でとても有名だ。
知っているからこそ恐れられ、命を狙われる程に……。

ハンター
サイトから抜粋』

side少女

「う～ん」

椅子に座ったまま天井に向かって伸びをする。
バキッバキッっと背中が鳴った。
どうやらいつの間にかかなりの時間が経っていたようだ。明るかった外はもうすでに暗くなっている。知らない間に雨が降っていたようだ。雨が窓にあたりポツポツと音楽を奏でている。

「意外と手間をとったな」

はぁ。

大きなため息をつく。
情報屋って意外と大変だ。簡単だと思ったんだけど、最近では僕の“碧眼の情報屋”って言う名前がかなり有名になったことで仕事の依頼がかなり増えた。そのせいで依頼の確認にかなりの時間が掛かる。やっぱり1年ぐらいは信用とお金を得るためとはいえに適当に依頼を受けたのが原因か。
今は信用とお金は手に入ったから、依頼主は選んでいる。むかつ

くやつや嫌なやつの依頼は受けてないし、喧嘩を売りたくないところの情報は売っていない。今では月に2～3件の依頼を受ければ多いほうだ。

【念能力発動『全てを知る本』】

僕の手の中に白い本が出てくる。

「この能力は創って正解だったな」

僕の“中”に知識は入っているけど最低限のものだから解らないことが結構あって、困ったんだよね。その時、念で情報（僕が知りたいこと）が入っているものを創ろう！　ってなったんだよね。

懐かしいな～。まだあそこから出て2年しかたっていないのにな……。

あっ！　『全てを知る本』出してたの忘れてた。

何か嫌な予感がするから調べようって思ってだしたんだった。

この手の嫌な予感は当たるんだよな。最近では何故か僕のことを暗殺しようとするやつが出てきたんだよね。この予感はそこ関係からか？……はぁ憂鬱だ。

早めに知って対処しないと面倒なことになりそうだしね。暗殺関連で調べてみるか。

頭の中に浮かべるのは“自分の命を狙っているもの”

ページがパラパラとめくられていく…。

ページには数人の名前が書いてあった。ざっと見たが知らない名前ばかりだ。この中に注意する人物はいない。

でもここで終わりじゃない。

もっと絞っていく“この中で僕が喧嘩を売りたくないと思っている人に依頼したもの”。僕が喧嘩を売りたくないと思っている人以外は気にしなくていいからね。

ページがパラパラとめくられていく…。

白紙。該当するものがいないとういうことだ。

でも嫌な予感は消えていない、どんどん強くなっている。

「！」

まだ行動に移していないのか！

予想だとこれで出てくるはずだ。ページを数人の名前が書いてあるところに戻す。

“この中に僕が喧嘩を売りたくないと思っている人に依頼しようと思っているもの”

ページがパラパラとめくれていく…。

一人の名前が載っていた。たしかこいつは裏社会で結構な権力を持っていたはずだ。

最後だ。“誰に依頼をしようと思っているのか”

ページがパラパラとめくれていく……止まった。

そこにはこう書かれていた。

『ゾルディック家』

情報屋と暗殺者2

「ゾルディック家・・・・」

……え？

何度見直してもそこには“ゾルディック家”っと書いてある。

……いやいやいや。無理だって！

あのゾルディック家の敵に回りたくない。例え暗殺に来たやつを殺しても絶対違うやつが来るだろうし。なにより家族殺されて黙っていると思えない。

「落ち着け、落ち着くんだ僕」

そう落ち着くんだ。

まだ依頼はされてないんだから依頼される前にどうにかすればいいんだ。

まずは調べてないと……。

＊　＊　＊

『全てを知る本』で調べた結果、ゾルディック家に依頼がくるのは3日後。

あと、ゾルディック家の情報は出せたから殺り合っても負けないと思う。けどゾルディック家から2～3人来られたら結構きついかも。僕はまだ発展途上(はってんとじょう)だからね。

でもビックリだよ自分ではまだゾルディック家を一人でも相手にしたら負けると思ってたんだけどな。
いつの間にこんなに強くなったんだ？
……まぁ多分最初からスペックが良かったからだろう。

はぁ、にしてもなるべくゾルディック家には喧嘩を売りたく無いんだよな。
ゾルディック家は暗殺一家だから情報はいるはず、まだ買って貰ってないけどこれから仲良くしようと（買って貰おうと）思っていたところなのだ。
何かいい案はないかな？

「こいつがゾルディック家に依頼する前に、僕がゾルディック家に依頼すればいいか」
手をポンっと打った。
「そうと決まれば手紙を書こう！」
〜１０分後〜
「書けた！」
少しアレになったがいい感じだと思う。……多分。

「よし！　じゃあゾルディック家に行くか」

手紙は直接置きに行こう。もちろん誰にもバレないように置いてずくに去る。『全てを知る本』を使って一番忍び込むのに良い時間を調べればいいだけだし。

まぁちょっとした悪戯（いたずら）だけど。

ｓｉｄｅゾルディック家

「おい、イルちょっとこっちに来い」

「何？父さん」

「なかなかに面白い物が届いた」

高そうなソファーに腰掛ける白銀（はくぎん）の髪をした男、シルバ・ゾルディックは息子のイルミ・ゾルディックに机の上にある手紙を指して見せた。

「手紙？」

模様などはなく、全てが青一色の手紙。そこらへんに売ってはいないだろうと予想できるものだ。

いや、ただ青い便箋と封筒なら売っているかもしれない。しかしその手紙が持つ雰囲気がただの手紙ではないと、普通の手紙ではないと思わせるのである。

このゾルディック家は暗殺一家である。よって暗殺の依頼から被害者の関係者からの怨（うら）みの手紙まで様々なものが届く。もっともそ

れはゾルディックの下には届かず、大概が執事達によって処分されるのだが。
だから今ここに届いた手紙があるのは大変珍しいことなのだ。

「さっきこの部屋に入ったら置いてあった」

その言葉にイルミは驚く。
この本邸までの道のりには様々なトラップが仕掛けてあり、その途中には執事の屋敷がある。本邸に来るためにはそれらすべてを通過しなければならない。そして奥まで侵入された場合本邸に連絡が入るようになっている。

しかしゾルディック家には侵入者の連絡は入っていない。よってこの手紙を置いていった人物は誰にも気付かれずに本邸に来たということだ。
これは驚愕(きょうがく)するのにあたいするものなのだ。

「何て書いてあるの？」

「呼んでみるか」

『　ゾルディック家へ
はじめまして碧眼の情報屋です。
今回は依頼とお願いがあったので送らせてもらいました。
依頼の内容は本日より三日後に私の暗殺依頼が入ります。それを“断わる”ことを依頼したいのです。
お願いの方は、本日より三日後本邸の方に訪問するので襲い掛かって来ないで欲しいというものです。怪我をさせるのは忍びないので。
それでは本日より三日後に会うのを楽しみにしています。

碧眼の情報屋』

「確かに面白いね」

「その依頼受けてみたらどうじゃ」

そう言って出て来たのはシルバよりだいぶ老けている白髪(はくはつ)の男。名前はゼノ・ゾルディック、シルバの父である。

「親父」

「最近有名になっている碧眼の情報屋がどんな人物か判断するのにちょうどいいじゃろう」

「本当に三日後に依頼が来るのかも気になるね」

「まぁ要注意人物であるな・・・・。よし、この依頼受けよう」

「まぁ本当にこの本邸に来るかは分からないけどね」

「実力を見せて貰おうではないか」

――――は悪戯を考えた子供のように口を歪めた。

情報屋と暗殺者２（後書き）

さてはて、一体誰が笑ったのだろうか？

情報屋と暗殺者３（前書き）

テストであまり書けませんでした（＜＿＞）

情報屋と暗殺者3

「そこの嬢ちゃん！　これ買ってきな！その名もゾルディックせんべい！　どうだい？」

……ゾルディックの人達は何とも思わないのかな？

恥ずかしいし、自分の家名のお菓子って何か微妙なような……。

会ったら聞いてみようかな？

＊　＊　＊

ポリポリ、パリパリ……。

ゾルディックせんべい意外とおいしい。

観光バスまだかな～。

待つのってつまんない……。

ポリポリ、パリパリ……。

でも手は止まらない。

なんて言うか機械的に食べてしまう。

ガサガサ……。

ん？

なくな「はーい。暗殺一家ゾルディック家観光ツアーバス到着し

ました～！」た…。

ちょうど良かったみたいだね。せんべいがなくなったところだよ。

「はーい。私は今回このツアーを案内させて……」

さてと、約束の日だからね。会うの楽しみだな♪

ゾルディックのところに着いたときのことでも考えてよ～。

どこから入ろうかな？正面なんて色々ありそうだしな～。

「あの～聞いてくれてます？」

やっぱり実力を試されるんだろうな。

「あの～……」

……戦闘になるかな？

「すいませ～ん…」

まぁ殺し合いではするつもりないけど……。

＊　＊　＊

「……グスン、間もなく到着いたします」

何か涙目(なみだめ)で見られてるけど、何なんだろう？何かしたっけ？　（

※考え事していて無視しまくったからです！）

まっ良いか。気にしてもしょうがない。

プシュー、ガタンッ。

あっ着いたみたい。

さて、行きますか。

情報屋と暗殺者3（後書き）

何か変な感じになってすいません（／＿；）

情報屋と暗殺者４（前書き）

新しい念能力がでます！

誤字脱字ありましたら報告してくれると嬉しいです。

情報屋と暗殺者４

ガサガサッ、シュンッ。

今、僕はゾルディック家の本邸向かって走っている。

別に走んなくてもいいんだけど、何もない森をただ歩くのはつまらないからね。

まぁ何もないと言ってもトラップがたくさんあるんだけど……

……て言うか、確実に三日前よりトラップ増えてる。歓迎されてないみたいだね。いや、逆に歓迎されているのか？

……執事もトラップの数に比例して多く配置されているみたいだ。はっきり言って邪魔だ。だって僕のこと認知（にんち）できるはずがないのだ。

なんて言ったって『死神の鎌』を発動しているんだから！　鎌に付いている赤・青・緑色の三色の珠によって効果が違っていて、今使っる赤珠は僕の姿を見えなくすることができる。だけど見えなくなるだけだから勘のいい奴や場慣れしている奴は見ることはできないけど、どこにいるかぐらいは分かってしまうのだ。だから執事が多くいるとこは認知できないぐらいのスピードで走り通り抜けている。でもこの『死神の鎌（じゅうじざい）』はすごく便利だ。なんて言ったって鎌の大きさが自由自在だから邪魔にならないし、効果を発動した後小さくしておけば手も空く。まぁ能力が良い分、念の消費量は多いけどね。

今は小さくしてピアスに見えるようにしている。どこから見ても只の飾りなのだ！

まだ本邸までかなりの距離があるな～。面倒だし時間が勿体無いから、スピードを上げようかな。

＊　＊　＊

タッタッタッタッタッタッ……タン。

誰にも見つからずに、到着！

それにしても何度見てもでかいな～。思わず見上げてしまう。見上げれば立派な屋敷と所々にギラリと光る数々のトラップの刃物が……。見なかったことにしよう。このゾルディックの屋敷（本邸）はとても立派だった、それだけ覚えておこう。これから中に入るのにこんなのを覚えていたら屋敷（本邸）の中までこんなんだと思えてしまう。うん、やり直そう。

誰にも見つからずに、到着！

それにしても何度見てもでかいな～。

と言っても今いるのは正面じゃなくてどっちかって言ったら裏になるんだけどね。

もっと詳しく言うと、ある部屋の窓の下にいる。何故ここにいるかと言うと、正面玄関には武装した怖いオーラを漂わせていた執事さん達がいたのと、窓のところの部屋にゾルディックの人達が居るからだ。

居ると言っても部屋に居るのは三人だけ、多分ゼノ・シルバ・イルミだろう。少し離れたところで観察しているのが三人かな。

ふぅ。

まぁ気にせず窓から侵入もと言い訪問しよう！窓はもちろん蹴破(けやぶ)る！

それではレッツゴー！

情報屋と暗殺者４（後書き）

何故か書いている間に主人公のテンションが可笑しくなってしまった・・・・。
次からは自重しようと思います。

情報屋と暗殺者５（前書き）

やっと名前を出せます！

意外なあの人が名付け親！

情報屋と暗殺者5

ｓｉｄｅイルミ

碧眼の情報屋から手紙が届いてちょうど三日後の今日ある人物から暗殺依頼が入った。暗殺対象は碧眼の情報屋。その依頼は断った。今回は碧眼の情報屋についた方がこちらにメリットが多いからだ。それに碧眼の情報屋の言っていた通り依頼が来たことが大きいだろう。どうやって情報を得ているのか少し気になる。

そんなことを思いながら碧眼の情報屋を待っていた。

ガッシャーン！！

音がした方を見ると蒼い髪をした少女が窓ガラスを割って入って来ていた。

そちらを警戒して見ていると、その少女は軽口一番こう言った。

「ごめん、窓ガラス割っちゃった♪修理代は後で払うから」

……面白そうに笑いながらそう言った。

大概の奴は名高い暗殺一家ゾルディックと解ったらもっと畏縮したり、あから様に恐れたりするものなんだけど……。

ゾルディックの名に怯えない奴は少ない。だから少し気に入った。

ｓｉｄｅ情報屋

「……」

何でそんなにこっちを凝視してるんですか！？
いや、いきなり窓ガラス割って入ったからのが原因だと分かってるけど、こんな微妙な雰囲気になると思わないよ……。何でこんな珍獣みたいに見るんだ？？

まぁ良いか。

「初めまして、手紙を出させていただいた碧眼の情報屋です」

ペコリとお辞儀をする。

「お前が碧眼の情報屋か？」
「？　はい」

そんなに驚くことかな？

（その年で末恐ろしいやつじゃわい）

ボソッと何か言われたが聞こえなかった。

なんなんだ？

「俺はシルバと言う」

「ゼノじゃ」

「イルミ」

キョトンとしてるのが分かったのだろ自己紹介してくれた。
そしてこっちを見られた。名乗れと言うことかな？

「え～と、僕名前教えられないんですよね」

言った瞬間威圧感が増した。

「それは我々を侮(あなど)っているのか？それとも名を教えられるほどの信用もないか？」

言われてちょっと焦った。そのせいで完全に敬語が抜けてしまった。

「いや、そう言う訳じゃなくて……僕名前無いんだよね～」

あの男がいた時は名前なんて呼ばれなかったし、情報屋をしてる時は人にまともに会うことなんて無かったしね。ホテルなんかに泊まるときは名前を書くけどそれはその場しのぎの偽名だから、名前じゃない。

はぁ。

こんなことなら自分でつけとけば良かった。

なんか同情と言うか哀れみの目を向けられた。シルバはちょっとばつが悪そう。イルミは……わからん。

「つけてあげようか？」

「は？」

何かイルミに言われたんだけど、何を言われたのかは今の僕の脳では理解出来なかったようだ。

「つけてあげるよ」

フリーズ。フリーズ。
いつそんな流れになったんだ！？
その無表情の下はどうなってるの！？

「な、なんで？」

今の僕は物凄く変な顔をしてるだろう。

「うん？少し気に入った」

「へ、へ～。あ、ありがとう？」

助けを求めるようにシルバとゼノを見る。

「いいんじゃないか？」

「そうじゃな、別に何のしょうもないしな」

……どうやら名前をつけることが決定したようだ。

「……」

名前を考えているんだろう。じ～と凝視されている。

「ヒスイ」

「へ？」

「ヒスイ。ヒスイで決定」

「ヒスイ？」

コクリと頷かれた。

「……ヒスイ。うん！ありがとう！」

初めて名前を貰って、嬉しくない訳がない。……たとえどんな流れでもね。

だからにっこりと笑ってお礼を言った。

ナデナデ。

何で撫(な)でられてるんだろう？

「父さん、ヒスイ家に置いてもいい？」

またまた、フリーズ。

何だその捨て猫かなんかを拾って来て親に「飼っていい？」って聞く感じのノリ！？

シルバの眉がよる。

「関係ない奴を住ます訳にはいかない」

そうだ！　もっと言え！

「でもヒスイは情報屋だから、十分闇の住人だと思うよ？　それに近くにいた方が情報を買いやすい」

その確かにみたいな顔をするな！

「でもな・・・」

「ふむ、相当な念能力者のようじゃし大丈夫じゃないかの？それに暗殺の方も手伝わせればいいじゃろう」

おい！

「ヒスイ、暗殺出来る？」

「え？暗殺技術は持ってるし、出来るけど……」

しまった！

現実逃避してたせいで良く考えないで答えてしまった……。

イルミは相変わらず無表情だけど、ニヤリと笑った気がした。

……それを見てまた現実逃避をし始める僕だった。

その後、実力を試すために暗殺依頼をして認めてもらった。

……拒否権？なかったよ？　もう最後の方は面倒くさくなったよ。

結果的には僕の念能力と働きを見たシルバ達は僕がここに居ることを賛成した。シルバとゼノにはゾルディックっと名乗ってもいいと言うお墨付(すみつ)きを貰った。

……只のお墨付きであって、本気でゾルディックになれとかじゃないよね？

念能力１（前書き）

こないだ出て来た念能力を追加しました。

今、ハンター試験内容をアニメとマンガどちらの筋で行くか悩んでいます。

よかったら意見をください。

念能力1

＜念能力＞

『全てを知る本』
姿…白い本。中は白紙。
効果…知りたいことを頭の中で思い浮かべる（口に出してもいい）と、ページが開き文字が浮かんでくる。
制約…思い浮かべるものはなるべく簡潔にし、曖昧なものだと正しい情報は出てこない。
　知りたい情報に人が関連している場合、その関連している人より自分が強くなければならない。
　人の情報を知りたい場合、その人より自分が強くなければ情報は出てこない。

『全てを見る目』
姿…発動時碧眼だった目が、翠玉石（エメラルド）色に変わる。
効果…武器など物を見るとすぐにその使い方・体の動かし方が理解できる。そのためすぐに一流になれる。
視た動きもすぐに理解できる。（すぐ出来るようになる）
念能力を凝を使わなくても見ることができ、見ただけでその能力がどうゆうものか理解できる。
制約…特に無し

『死神の鎌』
姿…漆黒の鎌。刃のところに三色（赤・青・緑）の珠が埋め込まれ

ている。普段の見た目は漆黒の鎌、しかし珠の能力発動時鎌に文様が浮き上がる。赤→薔薇の文様、青→ユリの文様、緑→若葉の文様、が浮き上がる。（ヒスイ自身は美しいと思っているが、見た人には美しいがゆえに不気味に思われることが多い。・・・・・戦闘狂や裏に関わっている人間は何故か気に入り、惹かれるらしい。）
変化…『死神の鎌』使用時（具現化しているとき）、髪が漆黒・目が紅色に染まる。

効果…珠には各々違う効果がある。
赤→姿が見えなくなる
青→記憶に残りにくくなる
緑→念の達人には例え完璧な“絶”でも居場所等はわからないがどこかに必ず居ると分かる。しかしこれは完璧な“絶”をも越えるもので発動している間は誰もヒスイの存在に気がつかない。

鎌にも効果があり、こっちの方が本命。鎌→例えどんなに小さな傷でもこの鎌で切れば、その傷はどんどん広がっていく。最後には確実に死ぬ。これを解くにはヒスイが解除するか、除念しなければならない。（傷は1日もあれば致命傷になってしまうので、それまでにどうにかしなければならない。）

制約…鎌の効果だけしか使わないのであれば特に何もないが、珠の効果も使う場合はかなりの量の念を必要とする。（ヒスイは人外と言って良いほどの念を持っているので、常人が1日が限界の念を使っても少し疲労感と眠気があるだけです。）
珠の個々の制約：
赤→勘の良いものや実力が有るものには何となく分かってしまう。一度見つかってしまうと意味がなくなる。
青→余り印象に残ることをしてしまうと、その部分だけ記憶に残ってしまう。使用後は一日食事を抜かなければならない。

緑→この珠は三色の中でも一番念を使う、そのため使用後は最低８時間は眠り続ける。

念能力１（後書き）

意見よろしくお願いします！

情報屋と弟！？（前書き）

ハンター試験の内容をマンガよりにするかアニメよりにするか悩んでいます。
どちらの方がいいかなどの意見・感想を募集中！
よろしくお願いします！

情報屋と弟！？

「……ヒスイ姉様！」

「うん？　ああ、カルトおはよう」

「……おはよう。どこに行くの？」

「暇だから散歩でも仕様かなと思って」

「……僕も行く」

カルトはそう言って服の端を掴んできた。

はっきり言ってものすごく可愛い。

弟って言えるような人はいなかったから余計可愛く思う。……

…イルミやカルトみたいに狂愛ではない。あれは色々となったら駄目だと思う。

今のカルトを見てると思うけど、初めて会った時からの態度を思い出すと考えられないほど懐かれたね。

〜回想中〜

しゃがんだ瞬間頭上を何かが、ビュンッと音をさせながら通過した。攻撃してきた人物を見てみるとまだ１０歳にもなっていなさそうな着物を着た黒髪の美少年が扇子を持って立っていた。あの扇子で攻撃されたらしい、でも只の扇子ではない。あれが只の扇子だったらある意味怖い。柱を寸断できる扇子が只の扇子な訳がない。

いや、扇子本体は普通の扇子なのだろう。けど念を纏っているのだ。念能力か念で強化しただけかもしれないけど、あたれば普通に死ぬから！　切れるから！
こうして考えているうちにも攻撃は止まずひたすら避ける動作を繰り返す。

「え～と、もう止めない？」

「侵入者は排除する」

「いや、侵入者じゃないんだけど」

シルバやゼノは僕の事を連絡してくれてないのか？

美少年の背後に回る。

「！」

着物の美少年は僕が背後に回った瞬間、驚きながらも振り向きながら扇子を一閃する。
扇子を避け偶（たま）に（手加減して）反撃したりしながら、観察する。
……この子を見ていると、なんか引っかかるんだよな～。
……黒髪。着物。美少年。どっかで聞いたような。

「ん？　……あっ！　思い出したイルミの弟のカルト君だ！」

いきなり名前を呼ばれたからだろうカルト君の肩がピクッと動いた。

「……何で名前」

「ん？　イルミとシルバとかから聞いた」

ちょっと驚いた顔をしたカルト君。

「客？」

攻撃はやめてくれたけど、まだ構えを解かず聞いてくる。
そんなに警戒しないで欲しいんだけどなぁ～。

「客？　て言うか居候？　……でも仕事手伝っていて、なかば強制的だったよね？　いや、そんなの関係なくやっぱり居候なのか？」

考え込んでいると視界にカルト君のビックリした顔が入った。

「ああ、ごめん。とにかく、ここに無期限滞在することになったヒスイです。よろしくねカルト君！」

わざとらしくにっこり笑って手を差し出した。
カルト君は僕の顔と手を見比べた。

「さっき言ったこと本当？」

疑り深く僕の顔を見て言ってきた。

「本当だよ。後でシルバ、ゼノ、イルミの誰かに聞けばいいよ」

ね？　と笑いかけた。
そしたら差し出した手を恐る恐る手を握って来た。

「……カルト」

「え？」

「……カルトでいい」

そう言って下を向いてしまったカルトく……カルト。

「うん。よろしくねカルト」

～回想終了～

あれで仲良くなれたかな～っと思ってたんだけど、しばらくの間会うたび毎回攻撃されたんだよね。
「本気で反撃して」と言われてからは容赦なく負かしてたんだど……。
何故かそうしているうちに“姉様”と呼ばれれ妙に懐かれた。今では一緒に散歩したりするぐらい仲が良い。

～後日～

「ヒスイ。カルトに気に入られたんだってね」

「え？うん。仲は良いよ。でもなんで僕カルトに気に入られたんだろう？」

「カルトより強かったのと、カルトの腕試しに最後まで付き合ってやったからじゃない？」

「ふ～ん。」

「まぁ。カルトがヒスイを気に入るのは当然と言えば当然だよ。だって俺や親父達までもがヒスイを気に入ってるんだから。」

「そんなに言うほど気に入られてるかな？」

たしかに気に入れられてるのは分かるけど、そこまで言うほどかな？

そういうとイルミは呆れたように溜息をついた。

「むっ。なんでそんないに呆れるんだよ」

「俺たちは暗殺者なんだよ？よっぽど信用して、気に入らない限り家に置くわけがない。このゾルディック家本邸に他人が住んだのはヒスイが初めてだよ。」

信用していると言われて少し嬉しかった。

「ああ、そうそう。カルトはブラコンだからシスコンにもなるかもしれないよ」

……。

……懐いてくれるのは嬉しいけど、狂愛だから素直に喜べない。

それから話し掛けた時から気になってたんだけど、なんでイルミ拗ねてる感じになってるの？

無表情だけどなんとなく表情をよめるようになった。これは一応僕の特技ってことにしている。

……イルミ以外で役に立つか分からないけどね。

イルミの方をうかがってみても、拗ねてる感はなくならない。

しょうがないので「なんで機嫌悪いの？」と訊いてみた。

そしたらちょっと驚いた顔をして「なんでもない」と言ってどこかに行ってしまった。

良く分からない行動・言動が多い家だな。

情報屋と弟！？（後書き）

・・・・文才が欲しい。

グダグタになってすいません。
うまく表現できるように頑張ります（T－T）。

情報屋と逃走と引きこもり（前書き）

しばらくはゾルディック家の話が続きそうです。

情報屋と逃走と引きこもり

タッタッタッタッタッタ。

ハァ、ハァ、ハァ……。

「撒(ま)けたかな？」

でも気は抜けない。

あのデブは何故か自分の趣味の事になると、異常なほどにしつこいからな。

ドタドタドタ……。

げっ。あいつだ。

バタンッ。

適当な部屋に入った。

「何をしてるんじゃ？」

「ゼノ！」

見た瞬間すばやく近づいた。

「なんじゃ？」

「ちょっと匿(かくま)って！！」
「いいぞ。ここはわしの部屋じゃからの。人はこないだろう」
「ありがとう！」
聞いた瞬間抱きついてしまった。
「あ、ごめんなさい」
「気にしておらんよ。じゃがどうしたんじゃ？」
「それがね……」
〜数時間前〜
「ねぇ、イルミって五人兄弟だよね？」
「？　そうだけど、なんで？」
「まだ会ったことない人がいるから」
「誰？」
「ミルキとキルアって人」
「キルは暗殺者に育てていて、あまり居ないからね」
「そうなんだ」

「ミルなら地下にいるよ。行けば会えると思うよ」

「ありがとう」

「ここか」

トントンッとノックをする。

「……」

声が聞こえないのでもう一度ノックしてから入る。……今思えばこの行動は絶対しないほうがよっかたっと後悔した。

「いったい誰だよ！　俺は今忙し……」

「？」

何故か僕を見てパソコンの前に座ったデ…男の人は固まった。多分この人がイルミの弟のミルキだろう。

なんでプルプル震えてるんだろう？

ちょっとほっといて部屋を観察してみる。

部屋の全体になんだか可愛い感じの人形など色々な物が置いてある。

「これを着てくれ！」

「へ？」

ガバッと何かを差し出された。
見てみるとフリフリ・ヒラヒラの何かの制服のようなもの。
ん？　どっかで見たような？
……ああ、あそこに置いてある人形と同じデザインのものだ。
「天然の蒼（あお）い髪に碧眼がいたなんて！」
「…えっと、僕のことだよね？」
「しかも僕っ子！！」
こっちの話しは聞いてないみたいだね。
でもなんでこんなにテンション上がってるんだこの男？
「さぁ、これを着るんだ！」
……何か怖いし、気持ち悪い。
なんだか興奮しながら可愛い服を持って迫ってくる男、いやデブでいいか。
キ　・　モ　・　イ！！
すぐさま回れ右をして走りだす。
「待て！！」
「追いかけてくるな――――！」
「ってなわけよ」
「あやつは頭は良いが馬鹿だからの～」

「馬鹿とかそう言う問題じゃないと思うんだけど！」

「イルミに助けてもらえなかったのか？」

「…イルミはなんで僕が着たくないのか分からないみたい。それと言ってないけどイルミもアレ着て欲しいっぽい。まぁ僕の嫌がる反応を見て面白がってるんだろうけど」

「……頑張って逃げることじゃな。匿うぐらいはしてやるからのう」

「つまり？」

「対処の仕方が分からん。一回半殺しにしたらどうじゃ？」

「前向きに検討しとく」

それから僕はデ……ミルキを避けに避け、危険を回避した。

……ちなみに半殺しはしていない。だって、今でも十分キモイのにこれ以上変なものに目覚めたら嫌すぎるからね。

情報屋と仕事と評価（前書き）

残酷な描写が入っています。

情報屋と仕事と評価

「ぐハっ！」

ドシャッ。

音が、声が、息が、聞こえるたびに血が舞う。

「ヒスイの念能力って便利だよね」

ズシャッ。

漆黒の鎌と針がまるで舞っているかのように、命を刈っていく。

一つ、一つ、と音が消えていく。

「イルミの念能力もいいと思うよ」

「当たり前。実用性（じつようせい）の無いものはつくらない」

「まぁね」

バシャッ。

「これで今日の仕事は終わり？」

下に転がっている今殺したばかりの人たちを見て訊（き）く。

「うん」

「じゃあ早く帰ろう♪」

「そうだね」

血の海をペチャペチャと音をさせながら歩く。

部屋のドアが閉まる音が静かすぎる部屋に響いた。

ｓｉｄｅヒスイ

ゾルディック家に帰ってくると出迎えに執事の人達が整列していた。最初に仕事から帰って来た時は驚いた。本邸への道にズラッと執事が並んでいたのだから。

「ただいま！」

「……」

「お帰りなさいませヒスイ様、イルミ様」

「「「「「お帰りなさいませ」」」」」

執事長のゴトーが代表に返してくれ、その後に全員が返してくれる。

最初は恥ずかしくてちょっと苦手だったけど、帰って来るのを待ってくれて“おかえり”と言ってくれるのは嬉しい。だからこの出迎えは好きだ。

まぁ僕のことは置いとくとして、挨拶をして無視されれば悲しいし、挨拶を返してくれれば嬉しいものだ。

よってすぐ横にいる奴が挨拶をしないのを見逃すわけにはいかない。

「イルミ」

短く名を呼び、ちょっと目を細めながらイルミを見上げる。これだけで状況把握ができているなら何を言いたいのか分かるはず。でもイルミは多分渋ると思うので、ジーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーと非難の目を向ける。

「……ただいま」

何やら物言いたげな、呆れたような雰囲気をかもしながら言うイルミの雰囲気を無視しながら、にっこり微笑みかける。

イルミが挨拶を返したことにゴトーはまず驚き、次に何故か僕とイルミを見て驚いていた顔をした後に少し表情を緩めながらもう一度「お帰りなさいませ」と頭を下げた。

？　なんで僕たちの方を見て驚くんだ？

まぁいいか。

「じゃあ僕はお風呂に入りたいから先に本邸に帰るね」

じゃっ！　とヒラヒラ手を振りながら本邸に向かって走る。

ｓｉｄｅイルミ

「不思議な方でございますね」

「……そうだね」

ゴトーがそう言うのも仕方がないだろう。ゾルディック家の本邸に住める人間（他人）がいるとは思わなかった。ヒスイを家に置いたのは興味があったからだ。本当はすぐ死ぬか出ていくと思っていた。でも実際はまだここに住んでいる。それだけでも驚きなのにヒスイは家族に気に入られいることが一番の驚くべき事実だろう。

……俺の表情を読めることにも驚いた。

「カルト様やミルキ様にも気に入られているようでしたので少し驚きました」

「カルトはヒスイのことを本当の姉の様に思っているみたいだからね。俺もヒスイのことは妹みたいで気に入っているけどね」

そう言うと何故かゴトーが何か言いたげな顔をした。

「なに？」

「いえ、なんでもございません」

（イルミ様は本当にヒスイ様を“妹”と思っていらっしゃるのだろうか？見ていたところ普段とはまた違う様子だったが……まぁご自身で答えを見つけた方がいいだろう。）

情報屋と仕事と評価（後書き）

作者：ゴトーの口調が書きにくい～～！
誰だ！ゴトーを出そうなんて言ったやつ！？

ヒスイ：君だろう！！

作者：・・・・・・・あっそうだった（「▽」；）

ヒスイ：この人の相手するの面倒だな・・・。

作者：酷いなヒスイ！お前を一から考えたのは誰だと思っている！？

ヒスイ：僕を創った人ならもう殺したけど？君も関与してたの？ふざけたこと考えてるなら殺るよ（にっこり）

作者：い、いえ。滅相もございません。それでは皆様命の危険が迫っているので今日はここで失礼させてもらいます。作者の気分でまたこのような会話を出すかもしれませんがそれではまた（（○（）／～～

ヒスイ：誰に言ってるの？
ヒスイ：え？挨拶しろ？さ、さようなら？（＾＿＾）／～～

情報屋と猫？

「おい、お前誰だよ」

敷地内をあるいていると、１０～１２歳ぐらいの少年に声をかけられた。

……殺気（さっき）をだしながらね。

「僕？」

「お前以外に誰がいるんだよ」

可笑しそうに少年は言った。

確かに今ここにはこの少年と僕しか近くにいない。

「ヒスイ」

自分を指差しながら言う。

「は？」

「名前だよ。ヒスイって言うんだ」

何故そこでガクッてなるんだ？

「名前を聞いたんじゃないんだけど」

「誰？って訊いたじゃん」

「はぁ。もういいよ。侵入者とかじゃないんだろ？」
なんか前にも同じようなことを訊かれた気がする。
誰に言われたっけ？
たしか……。
「居候（いそうろう）だよ」
こんな感じに答えたはず。
……でもやっぱり居候ってやだな。
「は？」
この少年、なんか僕が何か言ったことに対してこればっかり言ってるな。
「だから、い・そ・う・ろ・う！」
何回も言わせるな！
「は！？」
何でそんなに驚くんだ？
「はぁ。まぁそれはどうでもいいとして」
何か色々言われそう。

「そっちは？」

「？　なにが？」

「名前だよ名前。僕は名乗ったんだから次はそっちでしょ。これ礼儀(れいぎ)ね」

「（どこの礼儀だよ）」ボソッと少年が言った。

にっこり笑いかけて再度「名前は？」っと問いかけた。

僕はにっこり笑ったのに、なんでそこで少し怯える。

「キルア」

少し引きつった顔で答えてくれた。

その様子にクスリと笑うと、キッとこちらを睨んで拗ねたような顔をした。

「（かわいいかも）」

「？」

良かった。

聞こえてなかった。

なんて言うか猫？うん。猫だな猫。

思わず撫(な)でたくなるような猫。

「な！？」

うん？

「あっ！　ごめん無意識に撫でちゃってた」

あっ！　キルアの顔が少し赤くなった。

かわいい！　欲しい！

今気付いたんだけど、キルアってイルミの弟でカルトの兄だよね？

……イルミの弟でカルトの兄。

……ヤバイかも。あの狂愛にバレたら嫉妬で何かやられるかも。

「おい！　いい加減、手どけろよ！」

「ああ、ごめん」

しまった。

考え事してたらキルアを撫でてたの忘れてた。

「で、ヒスイって本当に侵入者（敵）じゃないの？」

そんな目をギラッとさせて訊かないで欲しいんだけど……。

戦闘狂か！？

「違うよ。信じられないなら、シルバやゼノに訊けばいいよ」

「親父と爺ちゃんに？」

「うん。結構前からいるんだけどな～」

「本当に住んでるのか？」

「何でそんなに疑う。本当だって言ってるだろ。わかった？」

近づいて指を指しながら言った。

「わ、わかったよ！」

「よし♪」

「（変な奴）」ボソッ。

情報屋と猫？（後書き）

何かのフラグがたった。

でもキルアとヒスイは恋愛ルートじゃなくて友達ルートで行こうと思っています。

だから断じて恋愛ルートのフラグではありません！・・・・・・多分。

情報屋と相談

「ねぇヒスイって暗殺の手伝いしてるよね？」

キルアとは初めて会ってから度々話すようになった。
仲良くはなったと思う。
今日も偶々キルアと会い雑談をしている時に、そうキルアは言った。

「うん。手伝ってる」

「ヒスイは暗殺嫌じゃないのか？」

「まぁ成り行きで手伝ってるけど、別になんとも思ってないよ。キルアは？」

そんなことを訊くってことは何かあったのかな～と思ったんだけんだよね。

「……殺しは嫌いじゃないし、暗殺も自分にあってると思う」

「でも納得してるようにも楽しそうにも見えないよ？」

キルアは目を見開いて驚いた様な顔をした。
その後、言うか言わないか悩んでいるみたいだった。

「僕は確かにゾルディック家にいるけど、ゾルディックに縛られているわけでもない。だからキルアに何かを強要したりしないし、

キルアの気持ちを否定したりしないよ。もちろん誰にも言わない」
仕事の時の話しとかしてるキルアってなんか嫌そうなんだよね。だから、暗殺嫌なんじゃないかなって思うんだよね。
「オレ」
「うん」
キルアは少し俯いていた顔を勢いよく上げた。
「オレ、この家出ようと思ってるんだ」
「うん」
「オレさぁやなんだよね人にレールしかれる人生ってやつ？」
「うん。キルアはそうゆうの合わなそう」
「……他になんか言わないのか？」
「他にって？」
「お前は暗殺者になるべきだ！とか」
「僕は最初に言ったよ？キルアの気持ちを否定しないし、強要しない。キルアはキルアのやりたいことをやればいいと思うよ？やりたいことをやって最後にキルアが本当にやりたいことを見つければいい。そのにやりたいことが暗殺者にだったら暗殺者をやればいい」

なんか唖然(あぜん)と言うかポカンとした顔で見られた。

何か変なこと言ったかな？

「（ありがとう）」

「うん？なんか言った？」

「なんでもねぇよ！」

何故いきなり照(て)れるんだ？

「それで、いつ出ていくんの？」

「しばらくしたら出ていく」

「そっか。一生に一度の人生だもん後悔しないように行動しなよ」

「ああ！」

キルアが嬉しそうな顔しながらうなずいたから良かったと思う。

でもキルアが家出したら、イルミとカルトあとキキョウらへんが大変だろうな……。

情報屋と変態１

「あっイルミ！」

暇だった僕はどこかに行こうかとゾルディック家の門前（ためしの門前）に向かっているとイルミを前に見つけた。

「おはよう」

「おはよう。なに？」

「イルミはどこ行くの？」

「ヒスイはどこ行くの？」

スルーされた？

「暇つぶしにどこか行こうかと思ってね」

「どこに行くか決まってる？」

「？　決まってないけど？」

「そう。じゃあついてくる？」

「うん？　ついて行っていいの？」

「今日は仕事じゃないから」

「どこ行くの？何しに行くの？」

仕事以外で出かけるなんて珍しいな。いつも仕事関係のことのことでしか外に出ないのに

「会う約束をしてる」

「誰と会うか教えて欲しいんだけど……って、あっ！」

スタスタとイルミは歩いて行ってしまった。

「待ってよ！」

僕まだ返事してないよね！？

なのにスタスタ歩いて行かないで欲しいんだけど……はぁイルミってマイペースだよね。いや、ただ話しを聞かないだけか？

はぁ。まっ！　暇だしついて行くか。

「僕も行くから少し待ってよ！」

僕はまた一つ溜め息をこぼしてからイルミを追いかけた。

けれど僕は知らなかったこの自分の行動を後悔するなんて……
…数時間前の自分に声を大にして助言したい「会いに行く相手のことはきちんと調べて会うかどうか決めろ」と……。

情報屋と変態２（前書き）

ヒソカの語尾は☆で統一してあります。

情報屋と変態2

「やぁ、久しぶり☆」

その人物を見た瞬間無意識に回れ右をして立ち去ろうとした。だけど、イルミに背を向けた瞬間に肩を掴まれたため逃げれなかった。

だってあきらかにおかしいよこの人。

だってピエロだよピエロ目の下になんかマーク描いてあるし、いや別にいいんだよピエロ風のでもね。

一番アレなのが雰囲気だよ。ここカフェテリアだよね？なんで周りに誰もいないの？なんか遠巻きに見られてるんですけど。

ああ。分かりますよ分かりますともあきらかに色々なとこが普通じゃないですもんね。

僕も出来れば遠巻きに見ていたい傍観者になりたい。

でも覚悟を決めないといけないだろう。……イルミは逃がしてくれる気、全然なさそうだしね。

仕方なくピエロの方を向き、イルミとピエロの会話に意識を向ける。

「久しぶり」

「ところで彼女は？」

にっこりと言っていいのか分からない笑みと、品定めするような視線を向けられる。

「ヒスイ。職業は情報屋ね」

「へぇ☆」

そんな面白いもの見〜つけた！みたいな目で見ないで欲しい。どこに興味持ったの！？

今気が付いたけど、イルミが会いに来たのになんで話さず優雅に紅茶飲んでるの！色々と助けてよ！

はぁ。なんか色々と諦めるしかないか……。

今さら何言ったって知り合いになっちゃったんだし、それにイルミの知り合いなら度々会うことになるだろうしね。

「そっちの名前は？」

ピエロはちょっと驚いたように目を開いた。

「聞いてなかったのかい？」

えぇ、聞いてませんよ！今は無理やりにでも訊かなかったことを後悔してるよ。

「イルミは誰に会いに行くか教えてくれなかったんだ」

「会った方が分かりやすいと思ったからね」

確かに会った方が分かりやすいでしょうよ！

でもこのピエロのことを言うと、僕がついて来ないと思ったから

言わなかっただろ！
……まぁ。この男の特徴を聞いてたらついて来なかったけどね。
だってこの男を言い表すなら、“ピエロ”と“危ない奴”だろう。そんな奴と知り合いになりたくないからね。もうなってるけど……。
しかもゾルディック家の人達以外での初めての知り合い。
……僕ってなんか色々と不幸だよね。

「で、名前は？」

「ヒソカだよ。よろしく☆」

「よろしく」

その後はイルミとヒソカの会話をなんとなく聞いて、たまに会話に参加してわりとのんびり過ごした。
しかしこの会話でヒソカが変態だと確信した。気に入ったものについて話す時が特に熱が入っていた。“青い果実”がいいんだってさ。その“青い果実”に認定された人は可哀想だなぁ。
まぁ他人事だけどね。

「ねぇヒスイ、気になってたんだけどヒスイの仕事時の名前、はなんて言うんだい？」

「え？　名前？」

「そう。ヒスイなんて情報屋聞いたことないからね。かなりの念の使い手だろ君？なのに情報屋として名が知られてないのはおかしいだろ？」

自分に興味を持たれたことにビックリした。……いや、嬉しくは無いんだけどね。逆に死刑宣告に聞こえるよ。こんなのに興味を持たれたら絶っっっっっっ対！　めんどくさいことになる。

「碧眼の情報屋」

それを聞いたヒソカは口の端を吊り上げる。

「いいのかいそんなに簡単に教えて☆」

「別に隠してる訳じゃない」

面倒なことが増えるから情報が流れるのは止めているけどね。

「まぁ、顔が割れると色々と面倒臭いから顔を出していないだけだよ。気に入ったり、信用できるやつには訊かれたりしたら教えることにしてるよ？」

そう言えばゾルディック家のみんな以外には言ったこと無いけど……。

「ヒソカはどれに入っているんだ？」

イルミは少し気になったようだ。

「う～ん……気に入るとはちょっと違うけど、面白い（ある意味）からいいかな～って」

そう言ったらイルミは納得したようだ。

「あっそうそうヒソカ」

「なんだい？」

「携帯番号とアドレスこれに書いてあるから、情報を買いたくなったら電話かメールしてね。割引するから」

「わかった☆」

何故かクスクス笑いながらヒソカは受け取った。

「こっちは僕の電話番号とアドレスが書いてあるから☆」

「あ、ありがとう」

かけないけどね。自分から面倒事に関わらないから。

「まぁ依頼じゃなくても何か面白いことが有ったら電話して」

気分を変えて言った。まだまだ自分は知らないことが沢山あるのでそれを知りたいと言う好奇心から出た言葉だった。

さっきとは違いニヤリと笑いながら「わかった☆」とヒソカは言った。

その笑みを見てヒスイは嫌な予感がしたとかしなかったとか……。

情報屋と変態２（後書き）

作者　：他視点のものを書こうと思うのですが、何か書いて欲しいものありますか？
ヒスイ：君の力量でできるの？
作者　：できるかもしれないし、できないかもしれない。
ヒスイ：どっちだよ！
作者　：まぁ頑張ってみるよ。アハハハハ・・・・（遠い目）
ヒスイ：・・・・こんな作者だからできなかったりできても駄文だとおもうけど、書いて欲しいものがあったら言ってあげて。
作者　：ヒスイ・・・！フォローありがとう。
ヒスイ：君がせいで僕がめんどくさいことになったら嫌だからね。（後で何か奢ってよね）
作者　：・・・・さあ！私の財布の危機なのでここらへんでさようなら――！（全力ダッシュ）
ヒスイ：あっこら待て！じゃっさようなら～。（待てーーーー！絶対に捕まえる）

情報屋と爆弾発言１（前書き）

サブタイトルが思いつかない（＜＿＞）

前回から少し時間がたっています。

情報屋と爆弾発言1

Ｐｒｕｕｕｕｕ……Ｐｒｕｕｕｕｕｕ……。

ケータイが鳴るのをじっと見る。

ものすごくでてはいけない気がする。

「……誰からだろう」

意を決して画面を見る。

『ヒソカ』

この時点でもうすでに嫌な予感は当たったも同然だ。

だがでなければここまで来そうだ。……それか次に会った時に今日のことを面白可笑しく言ってきそうだ。「こないだは無視したけど、今日は付き合ってくれるよね？」とか言いながら逃げられないように念能力をも使って、無理やり絶対変なところ（ヒソカの行きたがるところに、まともなところがあるとは思えない）に連れ回されるかも。そして行った先では絶っっっっっっ対人を殺すに決まってる！面倒事は嫌だ！！

いやまてよ、電話をでれるような状況じゃなかったとかいえばよくないか？……イルミに訊かれて終わるな。うん。

Ｐｒｕｕｕｕｕｕ……Ｐｒｕｕｕｕｕｕｕ……。

「あーもう！　でればいいんだろ！」
結構長い時間ほっといたのに。……諦めろよなヒソカめ。
ピッ。
この電話が掛かってきたときにもう何かが決まっていたんだろう。
はぁ。
「もしもし」
「やぁ☆」
「久しぶり」
「そうだね。三か月ぶりかな？」
「うん。で何？」
「つれないな～☆」
楽しんでるくせに何言ってるんだか。
「切るよ？要件は何？」
「久しぶりに会わないか？　因みにイルミも来るけど☆」
イルミがいるなら、まし……かな？

「ヒスイ来るよね？」

「はぁ。行くよ、行きますよ」

訊いてるくせに脅されて感じがするのはなんでだろう？

「わかった☆イルミにも言っとく☆」

クスクス笑ってるのがケータイごしにもわかる。……少しむかつく。

「じゃあカフェで待ってるから☆」

「ちょっと！どこのカ「ブチッ。Ｐｉ――――――――」……」

「おい！　こら――――――！」

呼んだくせにこれ！？　いちいち念能力使って調べろってこと！？

情報屋と爆弾発言１（後書き）

ヒスイ「ねぇ、ねぇ」
作者　「ん？」
ヒスイ「僕の扱いひどくない？」
作者　「・・・・気のせいじゃない？」
ヒスイ「い～や！ひどいって！！」
作者　「平気だよ！まだまだ序の口だから（＾－＾）」
ヒスイ「もっとひどくなるの！？」
作者　「うん♪多分ね♪」
ヒスイ「・・・・・・・・・・・・・もうやだ」
作者　「始めたからには終わらないよ？まぁ諦めて☆」
ヒスイ「☆をつけるな！あいつを思い出すじゃないか！・・・・・・はぁ」
作者　「君、大概不幸なんだからあんまり気にしちゃだめだよ」
ヒスイ「・・・・・・・・・・ｏｒｚ」
作者　「今回もありがとうございました！感想・意見等書いてくれると嬉しいです。よろしくお願いします（＾Ｏ＾）／」
ヒスイ「・・・・・・・・・・・・よろしくね」

情報屋と爆弾発言2

「やぁ、早かったね☆」

やっぱりわざとあのタイミングで、場所を告げずに切ったな？……殴ってもいいだろうか？良いよね？　どうせ当たんないだろうし。

シュンっ。

「怖いな～☆」

「（チッ）」

やっぱり、あたらなかった。

殴る前よりヒソカの機嫌が良くなっているのは何故？……ものすごく面白そうだな。できれば僕以外のもので遊んで欲しい……。

もう無視だ無視。

イルミにならって紅茶を注文し、飲む。

ヒソカは僕が無視をし始めたのが分かったのだろう。ちょっと機嫌が悪くなった。

そして何故そこでイルミの機嫌が良くなるだ？

……自分がこんな普通とはかけ離れた奴らの機嫌やらなんやらを、分かってしまっていることに気付き愕然とする。イルミの表情が読めるのは会う機会（時間）が多いからだと思っていたがどう

やら僕はイルミ以外の変人・奇人の表情も読めるようになったようだ。
……嬉しくない。こんなときに自分のスペックの高さとかを発揮しないで欲しい。いや、ヒソカに会ったばかりの時はヒソカが何を考えていそうかとかは分からなかった。あれだろうか何かのゲームのようにレベル1がレベル2とかになった感じなのだろうか？もしそうならきっかけは絶対ヒソカだろう……恨んでやる。
僕は別に変人・奇人と仲良くなれる、付き合っていけるようになるためのスキルなんて欲しいなんて思ってなかったのにな……。

僕がひたすら後悔してるとヒソカが爆弾発言した。

「ヒスイの代わりにハンター試験に応募しといたから☆」

……は？

「ゲホッゲホッ、はぁ、はぁ、はぁ」

むせてしまった。

「なんて？」

むかつく程満面の笑みを浮かべたバカ（ヒソカ）を睨む。

「ハンター試験に応募しといた☆」

「……何で！？」

「ヒスイって情報屋なのに自分に情報には疎いよね」

「それは全部知ったら面白くないから……ってそうじゃなくてなんで応募したのさ！？」

この場にイルミがいるということはお前も共犯だな！！

「俺が受けるから」

「僕が受けるから☆」

「……つまりお前らが受けるから僕も受けろと？」

どんだけ自己中なんだよ……。

あれ？

「……去年ヒソカハンター試験受けたって言ってなかったけ？」

「受けたよ☆」

「落ちたの？」

ヒソカの実力で落ちる試験って……。

「うん☆試験官半殺しにしちゃってね☆」

「……へぇ」

そりゃ落とされるよ。

「殺さなかったの？」

「殺すきも起きないぐらいつまんない試験だったんだよ☆それに殺す前に失格って言われたからね☆」

「早く帰りたかったの？」

ヒソカの顔に、よくできました～て感じの笑みが浮かんだ。

「で、なんで僕が行かなきゃいけないの？」

「暇だろ☆」

「試験は簡単だから落ちようとしない限り落ちないよ」

イルミがフォローするってことはイルミも似たような理由なのだろう。

僕は暇つぶしの道具か！　……訊いたら肯定されそうだから訊かないけどね。

「「ちなみに拒否権ない（から）（よ☆）」」

情報屋と悲鳴１（前書き）

序章のようなものです。
ことが起こる少し前のキルア視点。
短いです。

情報屋と悲鳴1

ヒスイっていうやつは本当に変なやつだ。知らない間にこちらの警戒心をなくすし、オレに暗殺者になれって言わない。

ヒスイが言うにはオレたちは“友達”らしいけど……。

友達と言うものがどんなものかオレは知らない。作るなと言われていたから作ったこともなかった。でもヒスイが初めての友達だと思うと心が少しあったかくなる気がする。この感じはキライじゃない。

友達がいるならここにいても良いかなっと思ったりもしたけど、やっぱりこの家を出てみたい。仕事以外で出たことがないから興味もある。

「やりたいことをやればいいっか……」

ヒスイが言っていた言葉。やりたいことそれはまだ分からない。でもこの家に居ても多分見つからない。ならここを出て行くだけだ。

情報屋と悲鳴２

「キャー！！！！！」

あのムカつくヒソカとイルミのやり取りから数日。庭でのんびり昼寝をしていたら、およそ人では出せないと思えるほどの高い声の悲鳴が屋敷の中から聞こえた。

「キキョウかな？」

と言うかあんな声出せるのはあの人だけだろう。て言うかいて欲しくない。あの声は頭に響く。

「っとそんなこと考えている場合じゃないか」

まっ、だいたい何があったか予想出来るけどね♪

僕の予想ではそろそろ……。

Ｐｒｕｕｕｕｕ……Ｐｒｕｕｕｕｕ……。

ほら来た。キキョウからだ。

Ｐｉ。

「もしもし？」

『ヒスイ！？　キルが家を出るって言って刺して逃げたの！　すぐ探して連れ戻して！！』

「ふ～ん、キルアがね。」

笑みの形になっ口がていくのが分かった。ばれないようにしないとっ。

『いい！？　絶対よ！！！！』

『Ｐｕ－－－－Ｐｕ－－－』

どうやら切られたようだ。他の奴にも連絡しているんだろう。それにしても僕は了承してないのにね？

さてさて様子を見に行こうっと♪

＊　＊　＊

「ウワーーっ。ゴフッ－－－－。」

今僕の機嫌は最高の気分だよ。だってあのふざけた服を着せようとしてくるデブことイルミがメッタメタにやられているからだよ！！　あっ脇腹（わきばら）をキルアの手刃で刺されたっぽい。ナイス！　キルア！！

フフフフフ……。僕にあんなものを着せようとするからこんなめに会うんだよ？　ザマーミロ！！！

はっ！　こんなのに構ってうる場合じゃない。キルアのとこ行かなきゃ！！

大分距離があいちゃったから急ごうっと。

情報屋と悲鳴3

タッタッタッ……。

ようやく前にキルアの後ろ姿が見えた。

どうやら執事見習いの子となにやら話している。足止めありがとうと言いたい。見送りが出来ないところだった。

「キルア！」

追いた。

「ヒスイ！」

キルアが驚いたようにこちらを見て声をあげた。

そしてちょっと警戒してこちらを見る。確かに家の人のほとんどがキルアを捕まえるように言われているから警戒するのはわかるけど……信用されてないみたいで、やっぱりちょっと悲しい。ああ。駄目だこんなことを考えて（思って）いたら気分が沈む。いじけてもいいだろうか？

「……キルア警戒するなんてひどくない？」

ポロリと本音がもれる。

「っ！！！」

「それに僕が背中を押したのに止めるわけないじゃん……」

「はぁ。分かった、分かったから、ごめん……だから泣きそうな顔するなよな」

「？　僕泣きそうな顔してた？」
「分かってなかったのか？」
「うん」
「……な～んかヒスイ相手にしてると偶にもっと年下相手にしてるように感じる」
生まれてからまだそんなに経ってないからキルアより年下と言うのはあってるけど……何か子供みたいでやだな。でも身体は１３～１６才ぐらいだから（多分）年齢は変わんないと思うんだけど。
「悪かったね。子供っぽくて」
「別に悪くないと思うぜ。ヒスイのそういうところ。じゃあ俺行くな」
「うん！　ありがとね。いってらっしゃい」
「いってらっしゃいませ」
僕達が話している間横で静かに立っていた女の子も見送りに来たようだ。
「じゃな～ヒスイ、カナリア！」
後ろでに手を振りながらキルアは行った。
キルアが行った後もずっと見送っていた、え～とカナリアだっけ？
その子がとても心配しているので良いことを教えてあげる。
「大丈夫だよキルアは、しばらくしたらここに戻ってくるから」
そう言ったら驚いたようにこちらを見てきた。それに笑って答える。

僕は危険かどうか調べもしないでキルアを送り出したりしない。キキョウから電話がきた時に調べてある。
もし危険だったら連れ戻さないといけなかったしね。すぐに会えるから心配しなくていい。僕がキルアに会えるってことはイルミもキルアに会えるってことだ。
イルミがキルアをほっとく訳がない。だからキルアは一度は必ず家に帰ってくる。まぁ僕には余り関係ないことだ。今はキルアにすぐに会えるという事だけ分かっていればいい。ヒソカとイルミのこと少しだけ許す気になったよ。

さてとそろそろ屋敷に戻るか、……戻れないね。いや、戻りたくない。きっとキキョウが大騒ぎして阿鼻叫喚(あびきょうかん)だろうし、色々訊かれそうだしね。今イルミが仕事でいなくて本当に良かった！いたらとてもめんどくさい事になっただろうから・・・・・アハハハハハ。

「ヒスイ様？」

不思議そうにカナリアが訊いてくる。

「あっ、なんでもないなんでもない」

よしこのままどっかに行こう。幸い隠れ家はあるし、そこでハンター試験の日までのんびりしてよう。そうだそれがいい！

と言うことで。

「じゃあ僕も行くから！　じゃあねカナリア！」

イルミが帰っている前に行こう。怖いからね。

情報屋と悲鳴３（後書き）

作者　：ところで二人のこと許してあげたの？

ヒスイ：うん？一様ね。

作者　：へ～、許したんだ。

ヒスイ：高級菓子店で色々奢らせ・・・・・食べさせてもらってね♪

作者　：たかったんだ・・・・。

ヒスイ：たかったなんて人聞きが悪いな～。まぁあれぐらいで許してあげたんだから感謝して欲しいよ♪

作者　：何も言うまい・・・・。

ヒスイ：懸命な判断だね。じゃあ僕らはここら辺で。

作者＆ヒスイ：さようなら～。

番外編1～キルア～（前書き）

リクエストして頂いたキルア視点です。
上手く出来たか分かりませんが・・・・。
時間軸的には家出の少し前だと思ってください。

後書きにも続いているので良かったら後書きも見てください。

番外編1～キルア～

暗殺の修行がなく暇だったオレは、家のある場所からかなり離れたところに来ていた。
そこら辺に寝転がり空を何気なし眺める。
どれくらいそうしていたかわからい。そうやってのんびりしていると、
「キルアー！」
オレの名前を呼びながらヒスイが駆けてきた。
ここに人が来るなんて予想外だったから、驚いて身を起こした。
「暇そうだね」
軽口一番にそう言われ少し拍子抜けする。何か急ぎの用でもあったのかと思ったのに。
返答しないオレに訝しげな顔をするヒスイが顔を覗きこんできたので返す。
「実際そうだからな」
ヒスイが来たから暇じゃなくなりそうだけどな。
「僕もちょうど暇だったんだ」
オレの返答を聞いて心なしか嬉しそうな顔をしたヒスイがそう言っ

た。
でもじゃあ何でオレのとこにきたんだ？
思ったことをそのまま言ってみた。
そうするとキョトンとして、慌てだした。
「え！なっなんかおかしい？？」
オレ達が今居るところは家からかなり離れているし、わざわざ来る奴もいないと思う。ここに来たヒスイの言動を見ればオレに会いに来たってことは分かる。でも暇なんだったらオレに会いにこなくても過ごせるし、会う必要はない。
「……おかしいって言うか、なんで会いに来たのか疑問に思った」
「？
暇な時とかって友達と遊んだりするものなんでしょ？」
「なんで疑問系なんだよ」
クスクス笑いながら訊いた。
そうするとヒスイはオレの横に座り、
「だってこの間まで友達なんていなかったから、話しとか聞いたことしか知らないんだからしょうがないじゃん。
……だから少し自身がなかったんだよ」
拗ねたように顔を背けながらそうヒスイは言った。
自主的にオレと遊びたいからきたんじゃないんだ。ふ～ん……
まぁいいけど。
「でも！」

いきなりガバッとこちらに顔を向けたヒスイは、

「でもそんな常識とかそんなくだらないことに縛られてキルアに会いに来たんじゃないから！
僕は僕が来たいからキルアに会いに来たんだよ！！」
そうたった今オレが心のなかで少し考えていたことを心を読んだみたいに否定して言った。

先程自分の感情が嘘のように消えていき、自覚はなかったが自分がヒスイに言われたことに対して拗ねていたことが分かり少し恥ずかしかった。
ヒスイは此方を伺うようにオレの顔を見ていた。……少し赤くなったであろうオレの顔を。
その羞恥で赤くなった顔を誤魔化すように言葉を紡いだ。

「オレも友達なんていなかったからそんなに知らないけどな」

オレの言ったことを聞いたヒスイは、

「同じだね」

そう言った。

「同じだな」

オレもそう返した。

知らずに顔を見合わせた瞬間オレたちは笑い出した。
何が可笑しいのか自分でもわからないけど、なんとなく嬉しくて笑ってしまう。

ヒスイも同じみたいだから、分からなくてもいいかと思う。
一緒にバカをやって、一緒に笑って同じ気持ちを感じる。
それがオレが思う友達。
これもヒスイと一緒にいたから分かったこと。それは多分ヒスイも同じ。

「友達っていいね」

笑って目に涙を溜めながらヒスイは言った。

「そうだな」

初めての友達。
それはオレが最初に見つけた宝物。

番外編1～キルア～（後書き）

二人の笑い声はしばらく続いた。
その声は思わず頬が緩んでしまうような笑い声だった。

二人の様子を見にきていたゴトウは二人の笑い声とその微笑ましい光景を見て思わず微笑んでいた。

情報屋と仕事１（前書き）

次回からハンター試験が始まります。
今回はクロロとの話しと言いますか。まぁフラグのようなものです。

情報屋と仕事1

……～～～～～～♪～～～～～～♪

仕事の依頼が来た時に鳴る音楽がパソコンからした。

「はぁ、まともな奴からの依頼がいいな～」

あきらかに此方の不利益になりそうなことを平気で依頼してくる奴がいるからやだやだ。

パソコンを開き依頼内容と依頼人を見るためにマウスを動かす。

カチッ、カチカチッ。

「え～と、匿名で面白い本ないか？って？」

……僕をなんだと思っているんだろう？

「にしてもこいつまた本の依頼かよ……」

初めてこいつから依頼がきたのは、まだ情報屋を初めて間もないころ。あの時は金と名を売る為に、ほとんどの依頼を受けてた。その中でも異色を放っていたのがこいつだ。毎回毎回、本やら書庫（あっ変わんないか）の依頼ばっか頼むやつだ。偶に他のお宝の場所を訊いてきたりもしたけど、基本的に本のことばかりだったと思う。

……一番印象に残っているのは、僕が教えた場所に幻影旅団が現れることだ。

調べてみれば旅団の団長クロロだし……。関わりたくねーとは思ったけど、時すでに遅し。今では何故かメールをするほど仲が良いと言うこの不思議。でもお互い名前等は名乗ってない。ただメールするだけ、この本が面白かったとか、こんなことが有ったとか・・・。

あれ!?よく思い返してみれば何でこんな仲良くなってんの!?知り合いレベルの仲が良いと思ってたけど、

これ完全に知り合いレベルじゃないよ!!……もしかしなくてもこんな風にメールでよくやり取りをしたりする人のことって友達って言わなかったか?……考えるのは後にして依頼をやろう。

にしても面白い本ね〜……。確かクロロが好きな著者の本をなんかのリストで見た気がする。最近調べたこと…リスト…本…オークションか!思い出した、思い出した!
ヨークシンのオークションに何が出るかとかカタログ発売前に知りたいから調べてくれって言う依頼があった時のリストにあったんだ。

「え〜と、『次のヨークシンのオークションに出される本の中に、良い感じの本があった』っとこれでいいよね?」

良いってことにしよう。

「ふぁ〜」

欠伸が出るくらい眠いし今日はもう寝ようかな。
電気のスイッチを消し、布団に潜りこむ。

「おやすみなさ〜い……ふぁ〜……」

情報屋と一次ハンター試験１（前書き）

お待たせしました。
原作に突入です！

～お知らせ～
サブタイトル『一歩』があるんですが、それがあまり気に入らなかったので編集・加筆させていただきました。
よかったら読み直してください（@＾＾）／～～～

情報屋と一次ハンター試験1

ガタンッ。

どうやらエレベーターがついたようだ。

ウィーン――――。

ドアが開いていく。それとともにザワザワと人の話し声が聞こえてくる。だが、ドアが開き僕が一歩踏み出した瞬間ピタッと静かになる。

――――――……。

今いる受験者たちにじっと観察されているのがフードごしにも分かった。

まぁ今の僕の格好は怪しいからね。でもいつもの僕よりであって変なコスプレチックなものではない（ミルキに着せられかけたけど）。下に行くにしたがって広がっていくタイプの黒の長ズボン、上はフード付きの蒼い長袖。フードは深く被り顔は見えないようにしている。髪は黒、眼は紅になっている。これは念能力『死神の鎌』を発動しているからだ。ちなみにそれと並行して青珠を発動してピアス風にして耳につけている。はたから見れば顔を隠している変な奴だろう。

ザワザワ……――――。

一通り観察し終わったのか視線のほとんどが外される。
身長からして子供だから警戒しなくていいと思われたんだろう。見た目だけで判断するなんて甘いと思うけど。

「ハイ、番号札」

僕は何番だろう？
……５５番か。なんか微妙だな。

イルミとヒソカもう来てるかな？
僕の番号は。“５５”だから１人は来ていると思うんだけど……。

「ヒスイ☆」

……いたね。しかもいて欲しくないほうが。

「……」
「ヒスイ☆」
「こないだ会った時、僕をこの試験に無理やりイルミと参加させたこと忘れたの？」
「無理やりじゃないよ☆勝手に無断で応募しただけだよ☆」
「同じことだ！！」
「そう？」
「……はぁ、もういいや」

今更何言ったってもう試験会場に来ちゃってるんだし。

「……ところでヒソカ」

「なんだい？」
「その番号狙ったでしょ」
「やだな～、そんなわけないじゃないか☆」
いや、だって、ねぇ？“４４”なんだもん。
「まぁ、どうでもいいか」
周りを見渡してみる。
「あとどれくらいで始まると思う？」
「まだかなり時間がかかると思うよ☆」
「ふ～ん。じゃあ端の方に行ってよ」
「僕と一緒にいればいいのに☆」
「面倒事はごめんだよ」
ヒソカのことだからそんな長い時間おとなしく待っているわけがない。面倒な騒ぎを起こすね、絶対。
「じゃっ！！」
ひらひらと手を振りながら何かを言われる前にヒソカから離れた。

番外ハンター試験１（前書き）

番外のハンター試験では主人公以外の視点から書いています。
今回はトンパ視点です。……自分でも何故こいつの視点を書いたのか不思議ですが、とりあえず書きました。
原作とほぼ同じです。漫画版を知らない方や忘れかけている方はどうぞ読んでください。
途中トンパから見た主人公の表現のところがあるのですが、そこを読んでもらった方がヒスイの念の能力がより分かると思います。
読んでくれたら幸いです。

番外ハンター試験１

ウィィ……ン。

新人だったら大歓迎だな。そう思いながら音と共に入ってきた奴らを見る。オッサンと少年と美少年、見たところ新人だ。ふふふふ、存分に楽しませてもらうかね。

「一体何人くらいいるんだろうね」

キョロキョロしながら話している奴らに俺は話しかける。

「君達で４０６人目だよ
よっオレはトンパよろしく」

新人丸出しだな。

「新顔だね君達」

釣竿を持ったのが４０６番、金髪碧眼の美少年が４０５番、スーツを着たおっさんが４０４番か。

「わかるの？」
「まーね！なにしろオレ１０歳絡もう３５回もテスト受けてるから」
「３５回！？」
「まぁ試験のベテランってわけだよ。わからないことは何でも教えてあげるよ！！」
「ありがとう」

まっ教えたことが本当かどうかはわからないけどな。
「じゃあここにいる人達みんな知ってるの？」
「当然よ！
よーしいろいろ紹介してやるよ！」
まっ毎回新人つぶしをしてるからな！
「１０４番蛇使いバーボン
あいつは非常に執念深いから敵にまわすとやっかいだぜ」

＊　＊　＊

だいたいの常連の紹介をやっているとそ声が響いた。
「ぎゃあぁ～～～～～～～～～～～～～っ」
「！！」
「アーーラ不思議☆
腕が消えちゃった☆タネも仕掛けもございません☆」
「お　オ　オ　オオレのォォ～～～～～」
「気をつけようね☆
人にぶつかったらあやまらなくちゃ☆」
「ちっ……
アブない奴が今年も来やがった」
本当にアブない奴が来やがったぜ。
「“４４”番奇術師ヒソカ　去年合格確実と言われながら気に入らない試験官を半殺しにして失格した奴だ」

「そんな奴が今年も堂々とテストを受けれんのかよ」
「当然さハンター試験は毎年試験官が変わる。そしてテストの内容はその試験官が自由に決めるんだ。
その年の試験官が「合格」と言えば悪魔だって合格できるおがハンター試験さ」

だから新人潰しなんかをやっていても誰からも咎められない。オレにとっては願ったり叶ったりだぜ。

「奴は去年試験官の他に２０人の受験生を再起不能にしている。極力近寄らねー方がいいぜ。他にもヤバイ奴はいっぱいいるからな。オレがいろいろ教えてやるから安心しな！」
「うん！」
「おっとそうだ」

持ち物の中から目的の四本の缶ジュースをだす。

「お近づきのしるしだ飲みなよ。お互いの健闘を祈ってカンパイだ」

飲んでも大丈夫だということをアピールするために何も細工をしていないジュースを飲む。

「ありがとう！」

くくく　そのジュースは強力な下剤いり！！
一口飲めば3日はトイレからでられねぇ！！お前らもうパンツをはいてテストを受けることすらできないぜ！！

「れろ」

ダ――――…。

「トンパさんこのジュース古くなってるよ！！味がヘン！」

「え！？あれ？おかしいな～～～～？」

ば…　ばかな。あの下剤はほとんど味も臭いもしないはず…！

このガキどんな味覚してやがるんだ！？

ダ――――…。

！

「あ…う」

他の二人も俺の下剤入りジュースを捨てやがった。くそが……。

ここはわざとじゃないとアピールするために謝っといたほうが良いな。

「申し訳ないっ！！」

「いいよそんなに謝んなくても。

でもよかったよオレが最初に飲んでみて、山とかでいろんな草や芽を試し食いしているから大体味で変なものがわかるんだ」

「い　いや～本当によかったよ」

く、くそ～～～。まぬけなボンボンかと思ったらとんだ野性児だぜ。

結局こいつらにも下剤入りジュースを飲ますことが出来なかったじゃねーか。

一体全体今年の新人はどうなってるんだ。ベテラン並みにくせのあるのがそろってやがる。

２９５番ハンゾー。声をかけたらえらい勢いでしゃべりだやがった

から簡単に飲むと思ったら異様な雰囲気をだして断られた。あれはプロの目と雰囲気だった。背中がゾクリとしたぜ。
１８８番、二コル。パソコンを持ったデブガキはオレのことを知っていやがって飲ませられなかったし。
さらに３０２番……こいつにいたってはやばくて声すらかけられねェ。

ん？あいつは……？
ちらりと目に映ったガキの番号は５５番。見た感じ新人だろうが……あんなやつ入ってきたか？
姿を見ながら首をひねる。話しかけた気がするがそこまでしか覚えていない。なにをオレは言ったけ……？
よく見るとそいつはヒソカと話していた。あんなやつと話す奴はヤバイやつなんだろう。関わらないことにする。

「トンパさーん！
さっきのジュースもっとくれる？」

オレのジュースを唯一飲んだ１００番の白髪のガキに声をかけられてハッとする。……オレは今誰について考えていたんだっけ？

「あ、ああ」

そんなことを思いながらも返事をした。

「キンチョーしてるのかな———。ノド渇いちゃって」

ゴク、ゴク……。

「あーうまい！！」

おかしな一本目の下剤はもうとっくに効いていてもいいはずなんだが……。

「オレなら平気だよ。訓練してるから毒じゃ死なない」

毒…？

こいつオレが何の薬を盛ったかまではわからないのに、それでも平気で飲んだってのか！？

とんでもねーぜ今年の新人（ルーキー）は。

それだけつぶしがいがあるってもんだ。

情報屋と一次ハンター試験２（前書き）

ヒスイがいることで５５番から原作の受験番号がずれています。

情報屋と一次ハンター試験２

壁に背をあずけ、目を閉じてゆっくりとしているとキルアの気配がした。どうやら試験会場に着いたみたいだ。そっと目を開けてキルアの番号を盗み見る。“１００”か、間違って攻撃しないようにしないとな。

「ねぇ君新顔だね」

「……」

何だこいつ。人が考えてる時にうるさいな・・・・。

「分かんない事があったら聞いてくれよ。俺３５回も試験受けてて、試験のベテランなんだ」

「……」

３５回？

……ああ、思い出した。余りにも下等な趣味を持っていたやつだったから忘れてたよ。え～と確か新人潰しのトンパだっけ？アホだよね、本当に。こんなことやってて何が楽しいんだか。無視しとけばいいかな？そのうち諦めてどっか行くだろう。

あっイルミの気配だ。どこかな～。

居た！居たけど……あの変装は止めて欲しい切実に。確かに楽なんだろうけどさ、他にも色々方法あるよね？なのに何故それにしたんだよ～！

イルミって分かっててても、イルミ＝あの針だらけの人にならないん

だけど。

はぁ、気にしないでおこう。気にしてたらこっちがもたない。
開けていた目を閉じる。

ん？
イルミの変装にツッコミをしていたらいつの間にか結構な時間が経っていたようだ。あの下等な奴の気配もいなくなってるしね。
早く試験始まってくれないかな～、でないと……。

シュンッ。

……ほら痺れを切らした誰かさんが念を纏ったトランプを投げてきたじゃん。ため息を吐きながらとんできたトランプを、当たる前に指と指の間に挟み止める。

「ぎゃあぁ～～～～～～～～～～～っ」

どうやら犠牲者がでたようだ。
ヒソカに何してくれてんの？僕何もしてないよね？どんな状況か気配と聴覚だけで把握しながら、ヒソカに意識を向ける。

「アーーラ不思議☆
腕が消えちゃった☆タネも仕掛けもございません☆」

「お　オ　オ　オオレのォォ～～～～～」

かわいそうなあの男に心の中で手をあわせておく。

「気をつけようね☆
人にぶつかったらあやまらなくちゃ☆」

……むしろぶつかっただけで腕を切ったヒソカが謝るべきだと思う僕は変なのだろうか？

アホなことをしていたヒソカは周りから向けられている視線を無視しながら、こっちに向かって来る。
来るな！！っと大きな声で言いたい……ものすごく。だが目の前まで来てしまわれては言っても意味はない。諦めて先程の行為について文句を言うことにする。

「ヒソカ、何？」

ずっと閉じていた目を開きながら、不機嫌な声と共に言ってやる。

「トランプの軌道上にヒスイがいただけだよ☆」
「別にトランプを投げなくてもいいくせに」

クスクス笑うヒソカ。

「それに軌道を変えるなんて事、簡単にできるだろう？」
「まあね☆」

……どうしてくれようこの変態。

情報屋と一次ハンター試験３

ジリリリリリリ……！！。

…！

……うるさいな。

「ただ今をもって受付け時間を終了いたします」

上から変なベル（？）を持った男が降りてきた。・・・・ある意味特徴的な顔をしている男が話し出した。

「ではこれよりハンター試験を開始いたします」

はぁ、やっと始まるのか。ヒソカから逃げるのもそろそろきつかったから、ちょうどよかった。

「こちらへどうぞ」

男は長いであろうトンネルの方向を指差す。

「さて　一応確認いたしますがハンター試験は大変厳しいものもあり運が悪かったり、実力が乏しかったりするとケガしたり死んだりします」

まぁ当然だよね。あ～でもヒソカとイルミが居る時点で死亡率が格段に上がってると思うけど……。

「先程のように受験生同士の争いで再起不能になる場合も多々ござ

います。
それでも構わない――――と言う方のみついて来て下さい」

ぞろぞろ……ザ、ザ、……。

「承知しました。
第一次試験４０５名全員参加ですね」

……参加してる7割は帰った方がいいと思うけど。まぁ僕は知り合い以外誰が死のうが知らないけどね。せいぜいヒソカの餌食にならないように気を付けてくれ。

ダダ！！
ザザザ……ドドド……。

スピードが変わったね。

「申し送れましたが私一次試験担当官のサトツと申します。
これより皆様を二次試験会場へ案内いたします」

「二次……？ってことは一次は？」

頭のテカリがすごい忍者服のやつが問いかけている。案内って言ってるんだからそのままの意味でしょう？この場所から二次試験会場まで距離は分からないけど、そこまで案内してくれる。だから僕達はただ付いて行けばいいだけでしょ？

「もう始まっているのでございます。
二次試験会場までついてくることこれが一次試験でございます」

ほらね。

……あのハゲを見て思ったけどあの格好恥ずかしくないのかな？他にもセンスを疑う感じのものを着ているやつがいっぱいいるけど……。うぅぅ、自分がこんな集団と同じ扱いだと思うと落ち込む。

「場所や到着時刻はお答えできません。
ただ私について来ていただきます」

つまらなそうな試験がスタートしたみたいだ。……だるい、面倒だもう帰りたい……はぁ。

情報屋と一次ハンター試験４

ガラガラ…ガラガラ…。

後ろのシャッターが閉まっていく。

何人かがあともう少しって感じに手を伸ばしてるけど、無情にもシャッターは閉まっていく。

まぁあの人達は幸運だと思うけどね。だってあの人達は試験には落ちるけど、死ぬことはないんだからね。

ざわざわ……ヒソヒソ……。

ん？　なんだろう？

気になり前に集まっている集団に近づき、見やすいように前の方に行く。……こういう時自分の身長が恨めしい。イルミやヒソカまではいらないけど、あと十センチ（足して１７０センチ位）は欲しい。

前に近づいて行くと声が聞こえてきた。

「…オレが本当の試験官だ！！」

「ニセ者！？どういうことだ！？」

「じゃ

こいつは一体…！？」

「どういうことだ」

ざわざわ……ざわざわ……。

どうやらもめているようだ。というより混乱しているのか。

「おい、おっさん！
証拠は有るんだろうな。あっちが偽者だって言う証拠はよ！？」

“４０４”番の男はサトツを指差しながら言う。確か走っている時、キルアと一緒にいたやつだ。……でも何故に半裸にネクタイなんだ。

「これを見ろ！！
ヌメーレ湿原に生息する人面猿！！」

「お、おいあれ……」

「ああ、試験官の顔そっくりだ！」

……サトツには悪いけど確かに似てる。

「人面猿は新鮮な人肉を好む、しかし手足が細長く非常に力が弱い。
そこで自ら人に扮し、言葉巧みに人間を湿原に連れ込み他の生き物と連携して獲物を生け捕りにするんだ！！」

ふむ、確かに動物にしては頭は良いな。上手い具合に他の受験生を疑心暗視にしてる。

「そいつはハンター試験に集まった受験生を一網打尽(いちもうだじん)にして喰うつもりだぞ！！」

でも頭が発達した代わりに本能が廃れたのかな？

もし本能がちゃんと機能してたら、念能力者の威圧感とか察して逃げると思うんだけどな～。

「なに！？」

「言われてみれば確かにそんな気もしないではないが……」

あっハゲも同調した。

「……どうりであの地下道の走り、人間離れしてると思ったんだよ」

いや、サトツ以外にも汗一つ掻かかなかった人いただろ。イルミとかヒソカとかキルアとか！　っと内心ツッコミをするが、声には出さない。面倒事はごめんだからね。

ざわざわ……ぞろぞろ……。

わぁ試験官に暴力行為しようとしてるー。……馬鹿だね。あの半裸男が場を煽って、結果あの偽者人面猿たちを手助けしてるね。まっ試験官できるくらいの念能力者なんだからこれ位の量で襲われても平気だろう。

ピクッ。

……訂正平気じゃないかも。ヒソカがこの場の雰囲気に乗じて、何かやりそう。

「これってやっぱり、ハンター試験なのかな？」

「試験……？」

ざわざわ……試験……。

ナイスだ釣竿の少年！　場の雰囲気が変わったから、ヒソカが乗じて何か出来ないはずだ……多分。

そうして見ているとあの半裸男が釣竿の少年と金髪碧眼の美少年に近づいて行った。少し興味があるから聞いてみようっと。

「（おい、ゴンお前なら分かるんじゃねーのか？例の野生児並みの感でよ）」

あの釣竿の少年はゴンと言うのか。ていうか野生児並みってどれくらいなんだろう？

「（うんうん、全然）」

「（あら、全然ってお前……）」

「（匂いがしないもん。すごく上手く化けてると思うよ）」

「（さようでございますか）」

へぇ～確かに良いものもってるじゃん。野生児以上だと思うねぇの才能は。……少し興味が出てきた。それにキルアと話していたみたいだから、キルアと友達になってあげて欲しいな。ついでに僕とも友達になってくれると嬉しいかも。……今の僕の友人関係で

まともな人（常識人）はあまりいないからね。

「見極める方法ならある！」

ゴン君に向いていた意識を話し始めた金髪の美少年へと向ける。見て分かったが、なかなか良いオーラを此方の少年も出していた。

「本物の試験官ならハンターのライセンスカードを持っているはず」

「ライセンスカード？」

……ゴン君それぐらい知っておこうよ。

「ハンターの適正を見ることを出来るのはハンターだけさ」

念能力者で信用があって手っ取りばやいからと言う理由もあるんだろうな～。

「と言うことは、あの人ハンターなの！？すっげー！！」

ゴン君やけにハンターと言う言葉に反応するな。過剰反応な気もするけど・・・・・何か理由があるとか？

まぁ僕はあんまり興味ないけどね。関係なさそうだし、なによりもし知りたくなったら調べればいいしね。

「カードはそいつに盗まれた。不意打ちされて何もかもだ！」

あ～そんなに頭良くなかったみたいだね。気づく奴は今ので気づくでしょ。

「なるほど」

金髪の少年は気づいたみたいだね。

「それじゃぁ、どっちがカードを持っていても証拠にはならねぇ」

……半裸の人は気づかなかったみたいだね。

ピクッ！

シュンッシュシュ……ドサッ。

あれ～なんでサトツの指にカードが挟まってるんだろー？わぁ顔面にカードが刺さってる人がいるー。……現実逃避はこのへんにして、状況整理してみよう。サトツの指には念を纏っているどこかで見たことがあるトランプ。面には偽者騒ぎを起こした奴がトランプを顔面にくらって絶命している。

こんなことをする奴は・……。

「なるほど、なるほど☆」

……こいつだ。

何してくれちゃってんだこの変態。……いきなり面倒事の火種になりそうなことを起こすなよな。

「な、なにしやがる」

「こうした方が早いでしょう☆」

あっ話している間に人面猿が逃げようとしてる。

ヒュッ……。

「ギャッ…」

あのまま死んだ振りしとけばよかったのに。ヒソカも生きてることに気づいていたから始終八苦殺されただろうけど。

「これで決定☆そっちが本物だね☆」

そうだ！　思い出したけど試験官への暴行行為って禁止されていたはず。そしてヒソカは今思いっきり違反した。っと言うことで違反した罰として失格にできるんじゃ……。よし！　やるんだサトツ！！　その変態を失格にするんだ！　主に僕の平穏ために（面倒事回避のために）！！

「試験官というのは審査委員会から依頼されたハンターが無償で任務につくもの☆

我々が目指すハンターの端くれともあろう者があの程度の攻撃を防げないわけがないからね☆」

説明通りサトツは本物の試験官だ。だから受験生を失格にする権利も持っている。だ・か・ら、あの変態を失格にするんだ！

「褒め言葉として受け取っておきましょう」

いや、受け取んなくていいから！

「しかし、次からはいかなる理由でも私への攻撃は試験官への反逆行為とみなして即失格とみなします」

……サトツ甘いよ。その変態が反省する性質だと思う？答えは否だ。

「はいはい☆」

ほらね？反省の“は”の字も窺えないよ。……はぁ僕の平穏がまた遠くに。

「ヒスイ☆　なにか言いたそうだけど、どうしたんだい？」

白々しい。

「……失格になれば良かったのに。ねぇそう思わない？」

いつの間にか後ろにいたイルミに振った。

「カタカタカタ」

あ～そういえば人前でというか、キルアがいるとこで話せないのか。声だけでもばれるからね。多分だけど僕に同意してる。

「ひどいな～☆クスクス…」

全然堪えてなさそうだな。……むかつく。

情報屋と一次ハンター試験5

「それではまいりましょうか
第二試験会場へ」

サトツの言葉を号令に再び走り出す。

ドドドドド……。

走って進むごとに足元がぬかるんでいき、足をつけるたびに少し沈む感覚が鬱陶しい。
はぁ……、靴だめになるかも。
そう少しめんどくさそうに溜め息を吐いていると、トントンと肩を叩かれた。

「ん？」

後ろを振り向き叩いた人を見る。

「なに？　どうかしたイ…ギタラクル？」

イルミといいそうになるのを慌てて止めて言い直しながら訊く。

「カタカタカタ」

そう何を言っているのかよく分からないことを言いながら、イルミは少し後ろの方を指差した。

「ん？何が……」

……人が食われてた。いや、人の方はどうでもいい。良くないのは食ってる方がある意味問題だ。背中にイチゴぽい木が生えている大きな亀がいた。

「……ああいうの好きでしょ？」

霧が出てきて姿が隠れたのとキルアが前のほうに行ったからイルミが普通に声を出して言った。

「うん！　見たことが無い珍しいものは好きだよ」

目線の先には今まで見たことが無いような生物がウジャウジャといる。

それらを見ていると自分の中から好奇心と探究心がむくむくと湧き出てくるのが分かった。

「見るの？」

「うん。全部といかないまでも見てみる」

「お「イルミは試験会場に行ってね。拒否権はなしだよ」……

……」

心配性？　なところがあるイルミが付いてくると言う前に駄目だと言っておく。

「僕は遅れないように試験会場に行くから大丈夫だよ。イルミは仕事関係で来てるんでしょ？

僕はライセンス取れなくても支障はないけど、イルミは支障があ

るんだから……ね？」

そう言いながら小首を傾げてイルミの顔を見る。

「……遅れたら罰だから」

「へ！？　罰ってなにさ！？」

僕の質問に答えることなくイルミは走って行く。

遅れないようにものすご～く気をつけよう。

「さて、イルミの発言は気になるけど気にしてたらやってらんないから、気にせず観察しますかな」

とりあえず近くにいた亀に近づいて観察するか。名前や特徴が分かるように『全てを知る本』を発動しようかな。

「え～と、あそこにいる亀はキリヒトノセガメか」

霧の深い日だけ活動する。背中に群生するヒトニイチゴを使い霧で迷いこんだ人間を誘い襲う……か。ふ～んあのイチゴは亀の一部じゃなくてただ生えているだけなんだ。生まれてきてからどれくらいで生えてくるんだろう？やっぱりすぐに背中から生えてくるんだろうか？？

「やぁ、何をしているんだい？☆」

ギギギギと音がしそうな感じに首を動かし、ゆっくりと後ろを見る。

……な、なんでいるんだよ～！！！

情報屋と一次ハンター試験６

「……で、なんでここにいるの？」

ものすごくゆっくり振り向いたところには、アホの変態ピエロがいた。

「ん？　退屈だったんだよ☆」

何が☆　だ！　明らかにおかしいだろ。

「答えになってないよね？」

頬がひくひくとなっているのを自覚しながら再度訊く。

「言った通りの意味だよ？　そして僕の中では答えになってる☆」

お　・　ま　・　え　の中だけな！！

「僕が今いるところは列のかなり後方なんだけど、わざわざここに何のようで？」

「暇つぶしに遊ぼうと思ってね☆」

「ふ～ん。どんな遊び？」

「試験官ごっこ☆」

「……へぇ～。じゃっ僕は忙しいから」

厄介事の気配を感じ取りすぐさま回れ右をして去ろうと急ぐ。

「やだな～☆

そんなに慌てなくてもいいのに☆」

パシッと襟首を持ち上げられ、ブラーンと体が揺れた。

「離せ！

それにこの持ち方は猫とかを持ち上げるときの持ち方だろ！」

「仲間外れはよくないよね☆」

話を訊けよ！

「大丈夫だよヒスイ」

「……なにが」

嫌な予感しかしない。

「充分似合ってるよ☆」

「う、うれしい訳あるか！！」

どこにも大丈夫な要素から！

「それじゃぁ行こうか☆」

「おいこら！
僕を無視して話を進めるな！離せ～～～」

ジタバタ暴れようとするが、離れない。……おかしい、僕はヒソカより力は強い（多分…）なのに離れない。
なんでだ？　何かあると思い『凝』で見てみる。すると体に変な糸のようなものが絡みついていた。僕はこの正体を知ってる。

「こんなことのために、なに念を使ってるんだよ！」

「クスクス……その方が面白いだろう？」

「僕はちっとも面白くない！！」

何故こんなとこだけ反応を返すんだよ……はぁ。もう疲れたどうとでもなれ。

ああ、僕の興味の対象からどんどん離れていく。

「……後で覚えてろよ」

絶対復讐してやると強く決心した。

その言動を見てヒソカの機嫌が上がったことで、僕の復讐心は大きくなっていった。

情報屋と一次ハンター試験7

しばらくヒソカは走るとスピードをゆるめた。見てみれば少し行ったところに行き遅れた受験生が固まっていた。

「ねぇヒソカ」

「うん？」

「あれがヒソカ標的？」

「そうなるかな☆」

「じゃあさ、その試験官ごっこだっけ？
それをやるならいい加減おろして欲しいんだけど……」

「なんでだい？」

「なんでって……」

今の自分の体勢を見る。抵抗をしていた最初の方は襟首を持たれたいわえるネコ等の小動物の持ち方だった。だが諦め大人しくすると逃げないと分かったのか持ち方が変わった。

今ヒソカはヒスイの膝の裏に片手を通し、残った片手は背中を支えながら走っている。

今の自分の持ち方の名前が分からないが、なんとなく恥ずかしい持ち方だと思うのだ。自分に合わないとも思う。とにかくおりたいのだ。

「この持ち方はなんか嫌だ」

「へぇ☆」

なんなんだその嫌な感じのにやにや顔は！

「ヒスイこの抱き方の名前しってるかい？」

「知らない…けど？」

首をゆるく振りながら答える。

「この抱き方はね☆　“お姫様抱っこ”ていうんだよ☆」

……へぇ。

「つまりあれか、これも嫌がらせなんだな」

「そんなつもりはないよ☆」

酷いな～☆　とぼやくやつなど知ったことか。

「傷つくな～☆」

顔に出ていたのだろうか。でもそんなことを言いながらもヒソカは可笑しそうに笑っている。

「顔、笑ってたら信憑性ないよ」

「でも嫌がらせじゃないから☆」

「じゃぁなんでこの持ち方？」

「ん～☆　僕がこう持ちたかったんだよ☆」

「ふ～ん」

この持ち方気に入ってるのかな？

「これでもヒスイのことは気に入ってるんだよ☆」

器用に片方の眉を上げながら言ってくるヒソカを見て何故か笑いがもれた。

「くすくす……知ってるよ。ヒソカもイルミも気に入らなかった人はすぐ殺すしね」

まぁヒソカに気に入られた人ももれなくヒソカに殺されるんだけどね。

あれ？　と言うことはいずれ僕もヒソカに殺されるのかな？

思ったことをそのまま言ってみるとヒソカは一瞬驚いた顔をして、

「ヒスイと殺し合うのも楽しそうだけど、ヒスイと一緒に殺す方が僕は面白いと思うよ☆　だから僕はヒスイを殺すことはないよ☆」

そう言った。……殺されることはないならいいけど、一緒に殺すっていうのはどうなんだ？

どう思っているとヒソカは会話が終わったと思ったのかトランプを投げた。

ドス！

「ぎゃっ」

一人、

ザク　グサァ

「ぐっ」

二人、三人、四人、五人。

あらら、いっきに五人も殺されちゃった。ご愁傷様、ヒソカに目をつけられたことが運の尽きだったんだよ。なんて思いながら心の中で手を合わせる。

「じゃあ、ヒスイの方に行ったのは自分で処理してね☆」

そんなふざけたことを言いながら、ヒソカは僕を降ろした。……この状況を作ったのってヒソカだよね？　僕って巻き込まれただけだよね？　なのになんで僕もこのお遊びに付き合わないといけないわけ？

一人で殺(や)れよ！　なんて思っているうちに、ヒソカはトランプを投げていく。

シュッ、シュゥ、ピシィ！！

おー、あの金髪美少年え～と確かクラピカだけ？　（ゴン君がそんな風に呼んでた気がする）　ヒソカのトランプに反応して弾いたよ。一般人にしては良い筋してるかも。

「ってえ――――――――――――！！」

レオリオ（半裸男）は普通に刺されたね。

ひぃぃぃ～～～～っ、うわあぁぁぁぁぁあ――――――――――！！

わぁ、阿鼻叫喚だー。なんて棒読みで言ってみる。まぁこの状況じゃ誰も聞いてな「そうだね☆」い……こともなかったみたいだね。この地獄耳め！

「てめぇら！！　何をしやがる！！」

え――――！？　てめぇらってなに！？　てめぇ“ら”って！！

ねぇ、君たちの目は節穴！　どう見たらこんな変態ピエロと一緒になるんだ！

……こんな状況下でヒソカの傍にいる時点でか！

ああ、こんなことなら降ろされてすぐにヒソカから離れるんだった。

後悔先にただず……か。……はぁ。

情報屋と一次ハンター試験８

ヒソカのカードのきる音がやけに大きく聞こえる。先程カードで切られた者たちは草原に転がり投げ出されいる。一撃で死ななかった者は傷を押さえて呻き、生き残った者はこちらを殺気だった目で睨んでくる。……まぁ睨まれているのは僕ではなくてヒソカだけどね。

う〜む、見事に阿鼻叫喚（あびきょうかん）だ。

「二次試験くらいまでは、大人しくしてようかとも思ったけど一次試験があまりにタルいんでさ☆」

出来ればそうして欲しかったな。……まぁ、ヒソカの性格上無理だろうけどね。

「選考作業を手伝ってやろうと思ってね☆　ボクが君たちを判定してやるよ☆」

わー、上から目線だ。有難迷惑（ありがためいわく）だろ。僕が言えるのはご愁傷様だけだね。

「判定？　くくく、バカどもめ。この霧だぜ一度試験官とはぐれたら最後、どこに向かったかわからない本隊を見つけ出すなんて不可能だ！！　つまりお前達も俺達も取り残された不合格者なんだよ！！」

ヒソカがトランプを投げる。ムカついたんだろう。僕も少しムカついたしね。なんで上から目線で言われないといけないんだ。ヒソカはともかく僕まで……て———え？

今、あいつ僕を認識していた？　青珠を発動しているから記憶に残っている筈ないのに……。普通なら、なんな奴いたか？　とかになるはずなのに……よっぽど印象に残ったりしないたいけないのに。

――あ。もしかしてヒソカといたからか？　それにこんな状況にいるし……。でもそれを言ったらイルミの顔もかなりのインパクトがあると思うんだけど……もしかして僕この能力発動している意味無いんじゃ……。

そうして考えているうちもヒソカとの間で場は進んでいく。

「失礼だな☆　キミといっしょにするなよ☆」

「お」

失礼な――――僕に嫌なことを気付かせてくれた奴はヒソカによって殺された。

「冥土の土産に覚えておきな☆　奇術師に不可能はないの☆」

「殺人狂どもめ。貴様らなどハンターになる資格なんてねーぜ！」

「二度と試験を受けれないようにしてやる…！！」

ちらりと彼らを見たヒソカは一枚のトランプをだす。

「そうだなァ～～～～…　君達まとめてこれ一枚で十分かな☆」

それに反応して奴らは僕らを取り囲む。

僕は無言でピアスに触れ耳から外し大きさを元に戻す。僕の身の

丈程もある鎌に。三つ付いている珠――――青球に触れ効果を消す。鎌から文様が消え漆黒の闇より暗い鎌の刃が底光りする。

「……悪いけど、八つ当たりさせてもらう。――――――自身の不幸を恨め」

こいつらの罪ではないけど、気付きたくないとこを気付かされて何かにストレスを発散しないとやってられないのだ。そう彼らは運が無かったのだ。死神と奇術師に目をつけられたのだから。

「ほざけェエ――――――！！」

僕とヒソカが同時に動く。僕は左にヒソカは右に、次々に反応できない速度で切り裂いていく。僕は淡淡（たんたん）と、ヒソカは狂ったように笑いながら。

「くっくっく、あっはっはぁ――――――ァ☆」

気付けば残り三人だけになっていた。

「君ら全員不合格だね☆」

残った者達にヒソカが目を向ける。

「残りは君達３人だけ☆」

４０４番の半裸ネクタイのレオリオ。４０３番の金髪美少年のクラピカ。５３番変な帽子をかぶった少年。その少年達だけだ。

三人は一ヶ所に集まり何か相談をしている。僕の聴力なら普通に聞こえるけどね。

「（おい、オレが合図したらバラバラに逃げるんだ。認めるのは癪だが、奴らは強い……！！）」

意外と冷静だなあいつら。

「（何故ならあいつらは、人を殺すことに一片のためらいすらないからだ。オレ達とは実戦経験において、天と地ほどに差がある。今のオレ達が三人がかりで戦おうが勝ち目はないだろう。）」

「（だ、だがよう……。）」

ヘンテコ帽子の提案にレオリオは納得出来ないようだ。それを見てヘンテコ帽子はレオリオを説得する。

「（お前達も強い目的があってハンターを目指しているんだろう。悔しいだろうが今は……。　ここは退くんだ！！）」

その言葉にクラピカとレオリオは頷く。

「今だ！！」

三人はバラバラに散っていく、ヒソカが誰かを殺しているうちに二人は逃げる感じか。一人でも多く生き残るための選択だね。

「なるほど、好判断だ☆　ごほうびに１０秒待ってやるよ☆」

ヒソカが数えるのを聞きながら鎌振り血を落とす。大きさを手のひらに収まるほどにして耳に付ける。

「じゅーう誰と遊ぼうかな…☆」

「僕はもう満足したし、あとはヒソカの好きにすれば」

レオリオが鉄パイプを持って来たのを見ながらそうヒソカに呟き、ヒソカから少し距離をとる。

「やっぱだめだわな。こちとらやられっぱなしでガマンできるほど……気ィ長くねーんだよォ――――――！！」

ヒソカに向かって走るレオリオ……あいつは強化系か放出系だな、うん。

「ん～～、いい顔だ☆」

レオリオが鉄パイプを振り下ろしヒソカを殴ろうとする。……だが遅い。　ヒソカは一歩横にずれレオリオの背後に回り込む。

レオリオが焦るような顔をするがもう遅く、ヒソカがレオリオに手を伸ばす。

シュッ――――ドコッ……。

ヒソカが何かに殴られる。飛んで来た方を見るとゴン君が釣り竿を振り上げた体勢でこちらを見ていた。あれでヒソカを殴ったんだろう。でもなんで釣り竿？

「ゴン！？」

そしてそんな面白そうなものをヒソカが見逃す訳がない。

ヒソカがゴン君に向かって行く。

「釣り竿？　おもしろい武器だね☆　ちょっと見せてよ☆」

「てめぇの相手はオレだ！！」

それを止めようとレオリオが鉄パイプを振り上げる。それにしてもついさっき『死』を認識し悟ったはずなのに、よくその『死』のイメージの原因たるヒソカに向かっていけるな。知らずのうちにフードのなかで口が笑みの形になる。――――面白い。

レオリオが殴り返され、それをみたゴン君が釣り竿で殴ろうとする。ヒソカはゴン君に見えない速度で近づき首をつかむ。

「仲間を助けにきたのかい？　いいコだね～～～～☆」

ヒソカはゴン君の顔を覗きこみ降ろす。

「大丈夫殺しちゃいないよ☆　彼は合格だから☆　ん～～☆」

もう一度ジ――とゴン君を見るヒソカ。その眼差しの意味を知ってゾクリと背筋が震える。

「うん！　君も合格☆　いいハンターになりなよ☆」

ものすごく良い笑顔でそう言うヒソカに戦慄していると携帯が鳴った。

P？。

「もしもし」

『ヒスイそろそろ戻ってこいよ。どうやらもうすぐ二次試験会場につくよ』

「うん、分かった。ありがとう」

『……早く来てよね』

Ｐｉ。

あのイルミが何か優しくて甘えた声を出してた……。

「ヒスイ？」

ヒソカに尋ねられ我に返る。携帯の画面にイルミの場所が表示される。それをヒソカに見せる。

「うん☆　わかった☆」

ヒソカはレオリオを担ぐ。

「お互い持つべきものは仲間だね☆　一人で戻れるかい？」

ゴン君頷くのをみるとヒソカがこちらを見る。視線をヒソカからゴン君に移す。それだけで何かまだあると分かるだろう。

「ヒスイ、遅刻はだめだよ☆」

そうヒソカは言ってさって行く。

ゴン君の方を見ると後ろに倒れそうになっていた。少し慌てて手を伸ばしゴン君右手を掴む。そこで初めて僕の存在に気付いたのか

ビクリと体を震わせこちらをよろよろと見てくる。その瞳に警戒が宿る前に話しかける。

「大丈夫？」

「え、う、うん」

「ゴン！？」

ゴン君の返事と戻って来たクラピカの声が重なる。クラピカは僕に気がつくとこちらに剣を向ける。

「クラピカ？　この人は平気だよ！」

驚いたゴン君がそう言った。

「……自分で言うのもなんだけど、初対面の人間を簡単に信用しない方がいい」

思わずそう言う。それを聞いて何故かクラピカは緊張を解きこちらによってくる。……何故？

「ゴン平気か？」

「うん。倒れそうになったけど、この人が支えてくれたから」

そう言ってゴン君は立ち上がる。

「談話は良いけど早く行かないと遅刻するんだけど」

「あっそうだった」

「追いかけるよ」

そう言い後ろも見ずに走り出す。しばらくして慌てたように走り寄って来る音が聞こえた。

……言えなかったな。まぁ、いいか。どうせたいしたことじゃないしね。心の中で言おうとしていたことを呟く。

――――ご愁傷様。そしておめでとう。君はヒソカの『青い果実』として認識された。

情報屋と一次ハンター試験８（後書き）

５３番はポックルです

情報屋と一次ハンター試験９

「こっち」

後ろをついて来ているクラピカとゴン君に試験会場の方を指さす。

「本当にこっちなのか？」

周りが木々ばかりで目印のようなものがないためか、僕の進路に不安を感じているみたい。

「大丈夫だよクラピカ！　こっちであってる」

「本当か？」

不思議そうにクラピカが言う。僕も少し不思議だ。

「うん。だってレオリオがつけていたオーデコロンの香りがこっちからする。ほら、レオリオがつけてたオーデコロン独特だから数？くらい先にいても分かるよね」

「（犬だなむしろ）」

ぼそりとクラピカがそう言うが、僕もやろうと思えば出来るんだけど……。

「それに……」

「道しるべみたいに動物の死骸が転がっている、だろ？」

ゴン君が言おうとしたことを読み取り続きを言う。

「ヒソカを騙そうとしたんだろうね。まぁでもヒソカに近づいた瞬間に殺されて、騙す時間なんか無かっただろうけど」

命知らずな動物だな〜。やっぱりここの動物は知能の代わりに本能が廃れているのかな？

「……よく知っているんだな」

「ん？　ヒソカのこと？」

「ああ、」

そんなに不思議かな？　傍からみたら違和感があるとか。……嬉しい気がするのは何故だろう？　ヒソカと同類……いや同じ変態だと思われてないとこが嬉しいのかも。

「う〜ん、意外と付き合い長いからね。一応これでもヒソカとは友達だし」

「本当に！？」

質問してきたクラピカは驚いて言う言葉がないって感じなのに、ゴン君は何故かくいついてきた。

「そんなに変？」

「……いや、気を悪くしたならすまない」

「別に思ってないよ。僕も最初会った時は関わりたくないと思ったからね」

今でもあまり関わりたくないけど……。あいつはわざと厄介事を持ってくるからな。

「まぁ、そんなに深く考えなくていいよ」

「じゃあ、え～と……」

「ヒスイだよ。呼び捨てで構わないから」

「オレはゴン！」

「私はクラピカと言う」

本当はもう知っているんだけどね。

「ねぇ、ヒスイ。ヒソカが言っていたオレとレオリオは合格って、一体……どういう意味？」

クラピカは興味深げにこちらを見ながら、ゴンは前を向きながら問うてくる。……二人ともヒソカが気になるんだ。良かったねヒソカー（棒読み）。

「僕らのアレは試験官ごっこ☆だよ。って言っても僕はただ無理やり参加させられただけだけどね。つまり僕らは君達を審査していたの」

「どうやって？」

「目を見て」

「目？」

「目を見てそいつの意思を、心を見ていた。まぁ最初の方の雑魚はそんな面倒なことしていないけど」

それにゴンとレオリオの審査をしたのはヒソカだ。僕は実質殺しただけで、審査なんてしてない。

「そう言えばオレもレオリオも顔をじっと見られた」

……視姦とも言う。

「それにゴンはヒソカに一発いれたんだろ？」

クラピカは他の要因も考えているようだ。

「おそらく自分と似たニオイを感じとったんじゃないか？　ヒソカにハンターの資格があるとは私は絶対思わない！」

あらら、ヒソカ嫌われてるよ。あっ、当たり前か。

「しかし……あの超人のような身のこなしと技は、見事と認めざるを得ない。戦闘という一点においてのみ奴は、天才的な才能の持ち主だ。……もちろんヒスイもだが」

褒められたよね？　なのになんでこんな闘争心と羨望の視線を向

けられるんだろう？　あれか見た目が君達と年齢が近いから好敵手（ライバル）と思われたか。

「特異な能力を持つ者が同じような才能の持ち主を発掘することはよくある。多分ヒソカなりの勘や経験で2人にハンターとしての素質や将来性を感じたのではないか？　“今、殺すにはおしい人材だ”そんな風に考えたのかもな」

クラピカの言っていることはだいたい当たっている。なぜならあの時普通なら死を感じ、恐怖する場でゴンは喜ぶような色が瞳にあったのだから。

「すまない。無神経だったな」

ゴンは俯いて止まってしまった。だがすぐに先程と同じように走り出す。

「ううん。少しずつわかってきた気がする。オレがあの時感じた変な気持ち。目の前に人がゴロゴロ倒れていてそうした張本人…ヒソカがオレの方に近づいてきた時。強力な圧迫感があって、怖くて逃げ出したいけど背を向けることも出来なくて、絶対戦っても勝ち目はない！！　オレも殺されるのかなァなんて考えながらその反面……なんていうのかな。殺されるかもしれない極限の状態なのにさ。変だよね？　オレあの時少しワクワクしていたんだ」

ヒソカがここに居たら喜んだだろうな～。にしてもなんというか少し狂っているね。ハンターに狂っていない奴なんていないと思うけどさ。けどこの受験者の中で一番狂っているのは僕だろうな。そしてだからこそ僕はこの狂っている奴らの中に居るおかげで少しだけまともに見える。目立たない。……見る奴が見ればすぐ分か

るだろうけどね。

前の方が明るくなってきた。もう森を抜けるな。

「じゃあね」

「あ！　ありがとう！」

ゴンの声を背に受けながら歩き辺りを見渡す。あれ？　イルミどこだ？　キョロキョロとしていると突如イルミの気配がしたと思ったら、浮遊感に襲われた。

「ちょっとイルミ！」

驚いたせいでイルミの名を言ってしまったが、そんなこと気にしてられない。な、なんでイルミにまでお姫様抱っこをされないといけないんだ〜〜〜！！

「降ろしてよ！」

「無理」

「無理ってちょっとイルミ！？」

騒いでいるとお姫様抱っこからイルミの左腕に座るような体勢にされた。あんまり変わんないんだけど――！！

「……ヒソカから聞いた。やってたんだろ？」

……なんで僕がそんな責めるように言われなくてはいけないんだ。ヒソカに無理やり抱っこされただけなんだけど。それになんで僕は罪悪感というか冷や汗を出さないといけない。あと、できれば聞き方によっては、いやらし聞こえるからそういう言い方はやめて欲しいんだけど。

「そういう言い方は変な誤解を受けるから止めて」

「……」

「あれは無理やり抱っこされただけだし」

「……」

「僕は嫌だった……」

「……」

「あ〜〜、もう！　分かった分かりました！　しばらく腕を借ります！」

「ああ」

――――――！！　なんでそこで微笑むの！　意味がわからない――――！！

おい！　そこでニヤニヤ笑ってるピエロ、後でしばき倒す！

情報屋と一次ハンター試験９（後書き）

ヒソカは後ろから見て、楽しんでます。

情報屋と二次ハンター試験１

イルミの腕に座ってしばらくするとゴオォと音を立てて前にある扉が開いた。
中にはソファーに座った女の人とその後ろに大男が居た。あれが試験官らしい。

「おまたせ！　どお？　お腹はすいてきたブハラ？」

軽い感じであいさつ？をした女の人は大男ブハラの方を向いてそう言った。

ぐるるるる……。

訊かなくてもこの音で分かる気がするんだけど……。それにしても、すごい腹の音だな…。

「訊いてのとおり、もーペコペコだよメンチ」

どうやら二次試験は女のメンチと男のブハラがやるようだ。

「そんなわけで二次試験は料理よ！！　美食ハンターのあたし達２人を満足させる食事を用意してちょうだい」

「料理！？　ってなんでこんなとこまで来て、料理なんてしなくちゃなんねぇんだ」

２５６番の小太りの男が何やら騒ぎだした。

「はいそこ、文句があるなら帰りなさい。他にも不満がある人は今すぐ帰っていいのよォ」

そう言って受験生達にガンを飛ば……見回すメンチ。態度悪！

「どうやら文句のある者は居ないようね」

居なくしたんじゃ……。

「で、どんな料理を作ればいいんだ？」

ハゲ忍者が腕を組み睨みながらメンチに訊く。それに二人が答える。

「まずは、オレの指定する料理を作ってもらい」

「そこで合格した者だけがあたしの指定する料理を作れる、っていうわけよ」

つまり……

「つまり、あたし達2人が“おいしい”と言えば晴れて二次試験合格！！　試験はあたし達が満腹になった時点で終了よ」

二回も料理しないといけないのかよ……めんどくさいなぁ。しかもあの大男のブハラはともかくメンチの方はあんまり食べなさそうだし。一体どんな料理を　作らせるんだか。

始まる前からヤル気が底辺だよ。

「そんなのありかよ！！　美味い不味いなんて人によって違うじゃねぇかよ！！」

さっきからあの２５６番うるさいな……。周りにも僕と同じように思っているのもいるだろう。

「俺達には美味くてもあんたら試験官の舌に合わなかったらお終いじゃァねぇかよ！」

なんとか３兄弟がそう言って騒ぐと、周りにいた受験生も同調して騒ぎだした。

……止めといた方がいいのにね。メンチの機嫌が悪くなるだけだし、それになに言ってもここでは試験官がルールなんだからさ。

「はい、はいはい」

メンチは手を叩き受験生を静かにさせる。

僕的には五月蠅かったから静めてくれて嬉しいけど、大半の者は殺気だってる感じだ。……こんな奴らと一緒なんて、本当に面倒だ。試験官に同情するね。

「いぃい？　さっきも言ったように試験を受けたくない者は帰って貰っていいのよぉ？　はい、さよなら」

どっか行けって感じに手を振るメンチ。うん、僕もああやって追い払いたい。主に面倒な受験者と変態ピエロに。

「バカ言うなよ！　ここまできて帰れるわけねぇだよ！！」

４０４番半裸スーツだった男のレオリオが手を振りオーバーアク

ションで自分の感情を言う。あんなに感情を表に出せるのはある意味羨ましい。まぁ、僕は羞恥心が無くならない限り出来ないだろうけど。

レオリオの言葉に触発されたのか受験生達が怒気を、顕わにして騒ぎだす。あっ殴り合いになりそう。２５６番の小太りが胸倉(むなぐら)を掴まれてる。

「うぜーなぁ、まったくよぉ！！　グダグダ言う奴はマジで帰れよ！！」

ツルピカ忍者が苛立ったように怒鳴った。にしても騒ぎになるたびにレオリオと忍者は叫んだりしてるけど……コンビでも組んでるのか？

「あの～、話の続きを」

ゴンは周りを気にせずメンチに話しかけてるし……。

「つまりぃ、私達２人に美味いってって言わせたら合格っていうわけよ。試験は私達が満腹になった時点で終了よ！」

「そんじゃぁ、オレのメニューは、豚の丸焼き！！　オレの大好物！　この森に居る世界で最も凶暴な豚、グレイトスタンプ！！」

「グレイトスタンプだってさイルミ」

首を回してイルミの方を見ながらそう言う。

「まぁ、楽勝だろう」

「まぁ、そうだろうね」

イルミやヒソカレベルで出来ないような試験だったら、他の受験者誰も受からないだろうしね。

「じゃ、捕まえてきますか」

イルミの腕から下りる。……やっと下りられたよ。
なんかこのままここに居ると、また誰かに抱っこさそうな気がするんだけど……。
こういう時は早々に離れるべきだ。豚が居る方向に足を向けようとして、ハタっと思い出した。

「ヒソカ♪」

「なんだい☆」

えいっ♪

「グッ☆」

ヒソカにこちらを向かせて、腹に一発強いのを打ち込みました！
やりましたヒスイ！
ちょっとガッツポーズをする。

「ひどいなァ☆」

「五月蠅い、念を纏ってないだけ有り難く思って。僕で遊ぶから悪いんだからね」

ふんっと鼻で笑ってから、二人に手を振り狩りに出た。

情報屋と二次ハンター試験１（後書き）

小太りの男→プロレスラーのトードー

情報屋と二次ハンター試験２（前書き）

感想で「ヒスイのスリーサイズが知りたい！」っというものがあったので、後書きにヒスイのスリーサイズを載せています。
知りたい人、知りたくない人等いると思うので、見るかどうかは自分で決めてください。

それではこれで、一旦失礼します。
最後に……更新遅くなってすいませんでした（＜＿＞）

情報屋と二次ハンター試験2

こちらに一直線に向かってくる豚を、少し白けたような視線で見てしまう。

調べた結果このグレートスタンプは豚の中で一番狂暴で強いと載っていたが弱い、弱すぎる。

一直線にしか進んでないし、ぶつかるまで止まらない。まぁ、ぶつかった岩や木がめちゃくちゃになっているから力は強いみたいだけどさ。でも僕達念能力者だったら楽に同じことが出来る。

「（確か、弱点は頭だったね）」

血走った目でこちらに向かってくるグレートスタンプを上に跳躍して避け、そのまま頭に踵落としで仕止める。

倒れたグレートスタンプを手早く手刀で腹を捌き、内臓を取る。最後に血抜きをする。

かなり大雑把だけどアレが食べるんだから平気だろう。

倒れた木から手頃な太さの枝を探し、グレートスタンプを串刺しにする。余った枝や木屑に火をつけ、串刺しにしたグレートスタンプを翳す。

「早く焼けろ～」

そんな声をかけながら焼くが、それで早く焼き終わるわけでもないんだけどね。

「スゥ……スゥ…。……ん。ほわぁ」

いつの間にかうたた寝をしてしまったようだ。

重い瞼を擦りながらグレートスタンプを見てみると、ちょうど良い感じに焼けている。……ちょっと半生のとこもあるけど、平気だよね。食べるのはあの大男だし。

もうヒソカとイルミは試験会場にいるだろう。あの二人が余計な事を心配するまえに帰るかな。

「よし」

グレートスタンプから串を抜き、担ぎ走って行く。

ちょうどだったのか、丸焼きを持った受験生が沢山いた。取り敢えず並んで丸焼きを置いておく。

「（自分で言うのもあれだけど、あの半生を食べてるし）」

「ヒスイ☆」

「にゃっ！」

ヒョイと持ち上げましたよこのピエロ、ヒョイっと！

「状況説明を求めるよ」

「ん？　僕がヒスイをお姫様抱っこしてる☆」

「だから！　なんで！」

「イルミの次は僕だろ☆」
なんの法則……？
「いつの間に、そんなの決まったの」
順番に抱っこするなんてさ。
「今☆　グッ☆」
肘鉄を一発脇腹に。

そんな風にヒソカとじゃれてると、銅鑼の音とメンチの「終――了ォ――――！！」という声が響いた。

「なに……？」

「丸焼きの受け付け終了の鐘みたいだね☆」

ああ、ただの豚の丸焼きだからすぐ終わるよね。
ヒソカからメンチの話に意識を向ける。そう意識だけ。
なにを考えているのかこの男、メンチの方向を向こうとしたら阻止しようとする。主に悪戯で。髪は引っ張るは、体を触ろうとするは、本当に何を考えているのか。……イルミは何故かヒソカが僕にちょっかい出すたびに、殺気をヒソカに放っている。
お前ら、ちょっとはちゃんと試験受けろよ！

「あんたねー、結局食べた豚全部おいしかったって言うの？　審査になんないじゃないのよ！」

なんか知らない間に、メンチ怒ってるし。

「ま――――いいじゃんそれなりに人数はしぼれたし、細かい味を審査するテストじゃないしさー」

ブハラ、君はただ豚を食べたかっただけじゃないだろな？

「甘いわねーアンタ。美食ハンターたる者、自分の味覚には正直に生きなきゃダメよ。ま、しかたないわね」

メンチの上げた手には銅鑼を叩く棒が……。

すぐに手を耳当てて、大変不本意だが頭をヒソカの胸に押しつける。抱っこされているのだからしょうがない、本当はしゃがみたいんだけど！

人間のスペックより優れてるというのは、こういうとき嫌になる。耳がガーンってなって、頭がぐらぐらするし耳がおかしくなる。

だ・か・ら！　ヒソカがニヤニヤしてても後悔しない！　しょうがないんだよ。……って僕は誰に言い訳してるんだ。

「豚の丸焼き料理審査！！　７１名通過！！」

傍迷惑な銅鑼の轟音と共にメンチがそう言った。

……あとで絶対文句言いに行こう。いや、むしろ八つ当たりしてやる。

ぅ、ぅ～、イルミが超見てる。顔が怖い。ヒソカの顔はキモイくらいにやけてる。

こいつら本当に意味分からん。僕を挟んで何やってるんだ？　こんな状況辞退するから二人でどっか行って、好きなだけ意味不明な

ことしててくれよ。
ヒソカとイルミが受験生達から離れる。もちろんヒソカに抱っこされている僕も一緒に。
「そんな怖い顔で睨むなよ☆」
「……」
ヒソカの言葉にイルミは答えず、僕をヒソカの腕の中から取った。今はイルミに抱っこされている。
「クスクス……☆　君、自分がなんでそんな行動しているのか、自分でも分かってないだろ☆」
「……それが？」
「いや☆　面白い☆」
僕は意味が分からなくて、面白くない。
「ヒスイも鈍いんだね☆」
「何が？」
「でもその方が面白いね☆　ああ、そうそうギタラクル☆」
ヒソカはイルミを呼び僕に聞こえないように、聞かないように目配せするとイルミに何かを言った。
その後イルミは僕が声をかけるまで固まっていた。

――――――――――もたもたしてるなら、僕が貰っちゃうよ？　それか、知らない奴に横から攫われるかもね☆

情報屋と二次ハンター試験２（後書き）

今から私こと作者が死ぬ気で調べたヒスイについての情報を公開します！

迅速に公開して、早急に帰ろうと思います。ばれたが最後、ヒスイに殺されますので……（ーー；）

『Ｂ７８　Ｗ５６　Ｈ８２
小柄で華奢な感じ、小動物ぽいかな☆
さわり心地と抱き心地が抜群☆
Ｂｙ奇術師』

変態ピエ……奇術師さんのこの情報セクハラだよね？　触り心地・抱き心地って……気にしないでいこうか。あまり気にすると、トランプがとんできそうな気が……。

『ヒスイは着痩せするタイプだよ。あとまだ成長途中らしくてよく下着を新調してるよ。
Ｂｙ暗殺者』

……イルミよ、お前もか！　お前も変態か！　何故下着のことを知っているんだ！？　ス、ストーカーか……！？（；一＿一）

情報屋と二次ハンター試験３

「二次試験後半。あたしのメニューは、スシよ！！」

というメンチの声をどこか他人事のように聞きながら、僕は非常に困っていた。

……本当にどうしよう？

ヒソカに何かを囁かれたイルミの様子が変だ。なんというか、重い。非常に空気が重い。周りに少しいた受験生達はササ――といなくなった。凄まじい逃げっぷりだ。出来るなら僕もそうしたいが、イルミに抱っこされている状況では無理だ。

だが、この空気は多分ヤバイ。なんていうか、アレだ、近づいたら殺される感じ。

ああ、なんでそんなところに僕もいるんだ。そして何をしたんだヒソカのやつ。

「え～と、どうしたの……？」

「ねぇ、ヒスイ」

「は、はい！」

黙っていたイルミがいきなり声を出した。ビックリするんじゃんか！　そしてその怖い雰囲気を消せ！

「ヒスイはさ、勝手にどっかに行かないよな？」

「は？」

何の話？　行くってどこに？

「俺のとこにいるよな？」

イルミのとこ……？　今現状的に言うと居るんだけど……。そういうことじゃないよね、多分。

とりあえず僕は、僕に分かることを言っておく。

「何の事を言っているのか知らないけど、僕は今此処にいるよ？で、どっか行く時もちゃんと言ってるし、これからもどこか行く時はちゃんと言うよ？」

なんだか、酷く微妙な顔をされた。ヒソカは隣で爆笑。

「相手にされてないじゃないか☆」

そうヒソカが言うと、イルミはもう視線で人が殺せそうな視線でヒソカを睨んだ。そして、溜め息を吐いた。

「とりあえず、ヒスイは俺のものだってことだよね？」

「いやいやいや！　どこがどうなってそうなった！」

「嫌？」

「嫌だね！　僕は物じゃない！」

「じゃあ、予定、予約、ってことで」

「意味分かんないんだけど！？」

「ん、実は俺もよく分かんない」

は？

「ただ、気分的に言うと、……ヒスイに近づく虫（おとこ）は一人残らず殺したいってことかな」

「え、え～と……、やっちゃ駄目だよ……？」

「近づく者は全て死ねば良い」

「いやいやいや！　ちょっと待て、バカ！　いきなり、はっちゃけるな！」

なに！　イルミに何があったの！？　誰か教えて！！

「ヒ、ヒソカ！　爆笑してないで、どうにかして！！　それか状況説明しろ――――！！」

依然（いぜん）、ヒソカは爆笑し、イルミは何か変。だ、駄目だ。なんというか、ダメだ……。どうにかしないと。

とりあえず……

「目を覚ませ――――！」

殴っておろうか。

殴った時に結構な音がしたが、知るもんか。

頭を押さえる二人を、放って他の受験者達の後を追ってキッチンに向かった。

キッチンにちょうど着くと、受験生達がなにやら騒いで勢いよく出て行った。

「魚！！！」

魚を取りに行ったのか。でも、なんで？

取りあえず『全てを知る本』を出し、スシというものを調べてみる。

「え～と、スシはジャッポンという小さな民族料理。主に生の魚介類の刺身をシャリにのせ握る、握り寿司が主流。スシを美味く握るためには、十年もの修行が必要だと言われている」

『全てを知る本』と『全てを見る目』を使えば多分作れるけど……他の受験生作れるのか？

あんまり使いたくないんだけど『全てを知る本』でこの試験の結果見るかな。イルミとヒソカが受からないなら、僕がやる意味無いからね。

え～と、スシの料理審査合格者数……０人。やっぱり合格する人

いないじゃん。なら適当にそこらへんで、のんびりしてようかな～。

「ちょっと、そこの受験番号５５番」

メンチに呼ばれたけど、僕なんかしたっけ？

メンチが座っているソファーの方に向かう。

「なに？」

「あんたは行かなくていいの？」

「どこに？」

「魚よ！　取りにいかないの？」

心配されているのだろうか？

「行かないけど？　興味ないしね」

何か問題ある？と首を傾げた。

「……受からなくてもいいの？　連れの二人は行ったけど」

「受かる受からないは、興味ないんだよね」

イルミ達に付き合わされただけだ。あ～でも、あの状態の二人を放っておいたのは、ちょっと失敗かも。まぁ、他の人のことはいいか。

「だったら、他の受験生達が帰ってくるまで私の暇つぶし相手に

なりなさい」

偉そうだな～。

「メンチー、失礼だよ？」

「うるさいわね。私はこの娘に訊きたいことがあるの！」

「僕に訊きたいことってなに？」

「え？　ああ、直球でいくわよ！　あんたどっちと付き合ってるの！？」

は！？

「ちょ、ちょっと待ってなんて？」

「あ～もう！　だから！　あの二人どっちと付き合ってるかって聞いてるの！　はっ！　まさか、二股！？」

「どっから見たらそう見えるの！？　付き合ってない！！」

興奮するメンチをブハラが、落ちつけようとするが効果はない。というかヒートアップしてる気が……。

「付き合ってないの！？」

「付き合ってない！！　冷静になって考えろ！　なんで僕があの馬鹿（へんたい）と付き合わないといけないんだ！！」

第一告白も何もされてないし、する予定もない。

「本当に？」

「くどい！」

どこを見ればそうなるんだ！？

「な～んだ。でも、アレ見てたら誰だってそう思うわよ」

「アレ……？」

「お姫様抱っことか、じゃれてたり。楽しそうだったから」

アレのせいかよ。ん？

「アレって、恋人同士がやるの？」

と、訊くと

「知らないでやってたの？　あれはバカップルがやるものよ」

と、メンチは呆れたように言い。

「んー、それは言いすぎだと思うけど、まぁ親しくなかったらやらないよね」

と、ブハラは困ったように言った。

何故か顔が熱くなってきた。

「もう、いい」

「なに、今更恥ずかしくなったの？」

「ぅ～、笑いな！」

その後もメンチは受験生達が帰って来るまで、僕の顔を見ながら可愛いー！と連呼しながら笑い続けた。

情報屋と二次ハンター試験４

受験生が戻って来たのを、これ幸いと理由にしてメンチと離れた。あのマシンガントークは、もう聞きたくない。そう思い壁の端に寄っておく。

イルミとヒソカは、帰ってくると僕に視線を向けるてくるが無視している。多分スシの作り方とか知りたいんだろう。

「ふん、誰が教えるもんか」

イルミとヒソカから顔を背ける。メンチはまだ言い足りなさそうな視線と、何故か僕を見ているキルアの視線からも顔を背けておく。

僕は何も知らない。知らないったら知らないんだ。キルアの探るような視線なんて、気にならない。だって別に嘘ついてるわけじゃないし、騙しているわけじゃない。そう、僕にはやましいとこなんてないんだ。そう心に言い聞かせる。

友達の視線に、かなりのダメージを受けているとメンチが怒鳴りだした。

見てみるとハゲ忍者が、襟首持たれて激しく揺すられている。気持ち悪くなりそうだなアレ。

「鮨をマトモに握れるようになるには、十年の修行が必要だって言われてんだ！！　キサマら素人がいくらカタチだけマネたって、天と地ほど味は違うんだよ。ボケ！！」

「んじゃそんなモン、テスト科目にすんなよ！！」

たしかにそうだよね。分かる、分かるよ。

「っせーよ。コラ。ハゲ、殺すぞ。文句あんのか、お！？　あ！？」

り、理不尽だ……。可哀想にあの忍者。ハゲって呼ばれるのと、アレって呼ばれるのどっちの方がましだろう？　ふと気になったが、あまり関係ないので忘れておく。

その後も色々忍者に怒鳴って、メンチのマシンガントークは終わった。忍者の背中には哀愁（あいしゅう）が漂っているいた。

あの忍者、僕に負けず劣らず不幸そうだな。そう思うと何故か少し親近感が……。機会があったら、話してみようかな。なんか話しているうちに暗くなりそうな気がするけど。

忍者に同情の視線を送っているとメンチが、

「悪（ワリ）！！　おなか、いっぱいになっちった」

と言った。

それにしても、語尾に　てへ☆　と付いたような幻聴が聞こえた。それだけ脳天気な感じにメンチが言ったのだからしょうがない。語尾の☆の想像のところで、違う人物が浮かんのだがこれは呪いだろうか？

「だから――しかたないでしょそうなっちゃったんだから」

またまたメンチの怒鳴る声が聞こえてきた。なにやら携帯の向こうの人に怒鳴っているようだ。メンチは怒鳴るのこと（マシンガントーク）が趣味なのだろうか？

「いやよ！！　結果は結果！！　やり直さないわよ！！」

後ろにいるブハラが、なにか言いたそうにメンチを見ている。周りの険悪な雰囲気を気にしているのだろうか？

「報告してた審査規定と違うってー！？　なんで！？　はじめからあたしが“おいしい”って言ったら、合格にするって話になってたでしょう！？」

ブハラが堪らず声を掛けた。

「それは建前で審査はあくまでヒントを見逃さない注意力と…」

「あんたはだまってな――――！！」

「メンチは食べることになるとみさかいがなくなるからな～……」

ああ、ブハラ玉砕されたよ。

「こっちにも事情があんのよテスト生の中に料理方をたまたま知っている奴がいてさ――――。そのバカハゲが、他の連中に作り方を全部バラしちゃったのよ」

「く……っ」

忍者が呻いてるよ。おしゃべり……直した方がいいかもね。

「とにかくあたしの結論は変わらないわ！」

そういうとメンチは電話を切った。それにしても、誰も受からな

いって知っていたとはいえこんな終わり方だったとは。

「二次試験後半の料理審査。合格者は０！！　よ」

その一言で受験生達が殺気だったよ。このまま試験官に戦いを挑むのかな？　無謀な自殺志願者って感じだね。本当にそうなるなら、早々に離れないとな。返り血で服がダメになるのは嫌だ。

そう思っていると、何かが壊れる音が盛大に響いた。見てみると二次試験が始まった時から騒いでいた２５６番の小太りの男がキッチンを壊したところだった。

「（自殺志願者一人目かな）」

青筋をたてながら２５６番は怒鳴り出した。

「納得いかねェな。とても、ハイそうですかと帰る気にはならねェ。オレが目指しているのはコックでのグルメでもねェ！！　ハンターだ！！　しかも賞金首（ブラックリスト）ハンター志望だぜ！！　美食ハンターごときに合否を決められたくねーな」

「……美食ハンターごとき？」

火に油を注ぐ馬鹿出現。

あ～あ、メンチが怒った。後ろには包丁が。

「そうだ！！　ハンターとは名ばかり、ただうまいもん食ってふんぞり返ってるのがハンターだと！！　笑わせんな！！」

２５６番がそう言うとメンチの後ろに立っていたブハラが立ち上がって前に出てきた。ブハラがやるのかな？　メンチは準備万端っ

て感じなのに……。
偉そうに言っていたくせに、２５６番はブハラの巨体にビビったのか後ろに２・３歩下がった。
「まちなブハラ。余計なマネしないでくれる」
準備万端だったメンチが不満そうにブハラに声を掛けた。
「だってさ、オレなら腕の２・３へし折るだけで済ませるけど、メンチやったらこいつを料理しちまうだろ？」
ああ、血みどろの料理だね……。
「へぇ、その料理ってやつ見てみたいなァ」
キルア！？　なんでそんな興味津津（きょうみしんしん）なのかな？　今のメンチに煽（あお）るようなこと言わないで欲しいんだけどなぁ～……。
血みどろの試験、明らかに面倒だろ。
「はぁ。たくっ、これだから素人は嫌なのよね。……分かったは２５６番、美食ハンターがどういうものか分からせてあげる。他の受験者もお土産代りに見ておくといいわ」
そう言ってメンチは包丁をしまった。どうやら、キルアの煽る発言に、逆に気が抜けたようだ。とりあえずは、良かったかな……？
「１時間ほど待っててちょうだい」
そう言ってメンチは試験会場から出て伸びをし、念を安定させた。
そして、脚に【凝】をして森の深くに行ってしまった。

１時間僕も待っていた方がいいのかな？　もう試験終わったなら、帰りたいんだけど……。

はぁ、イルミもヒソカも帰る気ないみたいだからしばらく待ちますか。

メンチ早く帰ってきてよね～！

情報屋と二次ハンター試験５

メンチが出て行ってから、３０分ほど経った。
受験生達は暇を持て余している。
ヒソカは欠伸をしているし、イルミは目を開けたまま寝ている。
そういう僕も暇を持て余していた。

なにかないかとあたりを見回し、入口が目に入った。
外に居た方が暇もまぎれるかもしれないそう思って、何故か誰もいない入口に向かって歩き出す。
入口から数歩歩き入口の方を振り返ると、【隠】をして壁に背を預けているサトツがこちらを見ていた。
元からそこに居たのは分かっていたので、驚くことはなかったけど、帰っていないことを不思議に思う。もしかしたらハンター試験が終わるまで、試験官は帰れないのかもしれない。　サトツがここにいる理由なんて興味は無いのだが、何故僕が見られているのか分からなくて首を傾げる。
とりあえず見てくるだけなので、気にせずあたりを見渡す。

「つまらないな」

見渡してもただうっそうとした森が広がっているだけだ。時間があればさっきのような獣を見に行いってるけど、もう３０分を切っている。こんな短い時間では行っても何もできないだろう。それが容易に分かって溜め息を吐くように呟いた。

「そうですかな？」

僕の呟きが気に入らなかったのか、それとも興味をひくようなも

のがあったのか、サトツがそう僕に向かって言ってきた。いつの間にか、距離が縮まっていた。サトツは会場と僕とのちょうど中心あたりにいた。

「……何か言った？」

振り向きわざとらしく訊き返す。これで僕が話す気がないことに気づいてほしい。

「そうですかな？　と言いました」

どうやら気付かなかったらしい。いや、気付かない振りをしたのかな……。

「君は違うの？　僕はとてもつまらないけど」

しょうがなく言葉を返す。

――――話さない方がいいと、自分の中の何かがそう言うのを気にしないように。

「私は大変目が離せないと展開だと思いますよ。とても興味深い」

この状況が興味深い？

「なんでそう思うの？」

「今年の受験生は大変優秀です。それにあのメンチが何を取って来るのか。これからどうなるのか。それを考えると、とても目が離せません」

「そう。……まぁ、興味を持つもんは人それぞれだと思うよ」

僕には、サトツが言うことが良く分からないけど。

「おや？　あなたは興味をそそられませんか？」

「まったく、ね」

「それは残念です」

そうサトツは言うが、まったく表情は変わっていない。僕も無表情だが、サトツも無表情になっていた。互いに何かを警戒していた。

「僕が興味を惹かれるのは未知だけだよ」

そこで間が出来る。そこで話は終わったなと思い会場に戻ろうとサトツの隣を通り過ぎる。

――――警鐘がなる。早くこいつから離れろと。こいつは僕にとって、言って欲しくない事実を……

「ああ、そうそう。言い忘れていたことが1つありました」

呟くように言ったその一言に、僕の足は止まる。

「私はあなたにも大変興味があります。おそらく気付くものは気付き、あなたに興味（きょうふ）を抱くはずですよ。

――――興味という名の恐怖を」

たんたんと、探るように、ただ事実を告げるように、まるで罪人に罪を宣告する裁判官のように話すサトツを横目で見る。

見ることしかできない。体が石になったかのように硬直していた。

「あなたのオーラは酷く禍々しく、同時に酷く綺麗だ。そのオーラは様々な者を惹きつけるでしょう。言うなれば、異形の天使っと

いうところでしょうか。
他にいうならば……そう、あなたのオーラは、様々なオーラを混ぜ合わせたモノが人型をとっているような。酷く強大に感じるのに【凝】で見ても一般人のそれとあまり変わらない」
今、僕はどんな顔をしてるのだろうか？
今、僕はどんな目をしているのだろうか？
「これはどういうことですかね？　それともこれが、あなたの【念】の能力なのでしょうか？
会長と同等かそれ以上に感じるあなたは、いったい何者なのか。いやはや、興味がつきません」
――――あなたは、人なんですか？
そう聞かれた気がした。

今回サトツが話したかったのは、コレなんだろう。いつも傍に居る二人はいなく、周りにも人はいない。話をするのには好都合だろう。
そう、思考は冷静に判断する。ただ、自分の中のなにかが冷えて行くのが分かった。
今の僕の状態を知られないために、言葉を返さなくてはと口を開く。
「そんなに警戒しなくても良いと思うんだけどな……。僕はバカ（ヒソカ）とは違ってさっきも敵意も向けてないだから」
「それは失礼しました。これでも私は用心深いんですよ」

まったくそう思っていなさそうな声と共にサトツは頭を下げた。

「さっきの質問には、答える気はさらさらないよ。他人に言うなんて論外だからね。

これはね、僕だけの秘密なんだよ。……誰一人として言うつもりはない」

それだけ言ってサトツの横を完全に通りすぎる。

進む方向は会場では無く森。

森に入って少し行ったところで足を止めた。

口が弧を描き、笑った。

イラつくき、ムカつき、気分は最悪。

僕には心なんて無いはずなのに、あってもまともな心ではないのに。

こんな時だけ、何故こんな時だけ、こんな感情を感じるなのだろうか――――。

感じたい者は感じられないのに、なんで――――。

――――なんで、こんな泣きたい気持ちにさせるんだ。

そんなことを思う自分が、可笑しくて。
ただ、当たり前の人ではいということに悲しむ自分が、可笑しくて。
そんな自分が、悲しくて。

だから、
嗤(わら)いながら、
少し、少しだけ……泣いた。

情報屋と二次ハンター試験６

顔を両手覆い座っていると、いきなり凄まじい音が鳴り響いた。地面もその衝撃を受けたのか少し揺れた。

音がしたところ向いていみると、そこは先程までサトツと話した場所だった。ただ先程とは違い、地面は抉れ大きなクレーターが出来ていた。その中心にいる老人が起こしたであろうクレータの周りには受験生たちが集まっている。上に気球があるということは、あの老人はあそこから降りてきたのだろう。それを想像して納得する。何故か集まっている受験生達の顔が微妙に引きつっているから、なにがあったのかと思ってしまった。

……それにしても、どうしてくれようかこの気持ち。

僕が感傷に浸っているといるというのに、こんなギャグを狙ったように降りてきた爺さんのせいで酷く微妙な気持ちになってしまった。なんだ？　あれか、僕には泣く暇もないのか。平穏はどこに行った。そんなに泣いているいたいけな少女を、虐めるのが好きなのかお前ら。

だからハンターなんて嫌いなんだ。今まで会ったハンター全員が全員嫌な奴だったし。お前らにはデリカシーはないのか！　僕にもプライバシーがあるんだ！　しまいには泣くぞこんちくしょう！！

「なに不貞腐れてるの」

すぐ傍で聞こえた声にピタリと固まる。顔を上げてみればイルミとヒソカが前に立っていた。……こんなに近づかれるまで気付かないなんて、そうとうヤバイな。

「ほら行くよ」
「2次試験をやり直すために、移動するんだってさ☆」
イルミの言葉に補足を入れるヒソカは、そう言って歩き出した。
その二人を見ていたら、だいぶ落ち着いてきた。
「ん、」
“うん”と答えようとしたが、泣いたせいか上手く答えられなかった。その答えがなんだか子供ぽく感じられて、甘えていると感じてなんとなく恥ずかしくて二人を追い抜いて飛行船に向かった。

飛行船はすぐに試験を行う場所に到着した。試験内容はマフタツ山の谷にあるクモワシの卵を取ってくることらしい。
最初に見本としてメンチが飛び降りて行った。崖の高さをみた受験生の中にはその光景にビビっているのもいる。こんなことで尻込みするならハンター試験なんて受けない方が身のためだと思うけど……。
「よっと。このクモワシの卵で、ゆで卵をつくるのよ」
崖から上がってきたメンチは手に持った茶色の卵を掲げながらそう言った。卵の大きさは普通の卵と変わらないように見える。何が他と違うんだろう？
「あーよかった」
「こーゆーのを待ってたんだよね」
「走るのやら民族料理よりよっぽど早くて分かりやすいぜ。よっ

しゃ行くぜ」
「そりゃーー！！」

ゴン、キルア、クラピカ、レオリオの４人はそう言って一番最初に崖に飛び降りていった。元気がいいのはいいけど、あの掛け声とかは恥ずかしいと思う。４人に続くように崖から飛び降りながら、そんなどうでもいいことを思う。見てみればイルミとヒソカも飛び降りていた。
目の端を通りすぎるクモワシの糸に捕まる。ゴムのような伸縮性を持っているのか、反動で上に行く。上手く糸の上に乗り、巣から卵を取っていると耳が何かを聞いた。
耳をすましてみると、羽根の羽ばたきような音が近づいてくる。

「……早く登った方が良さそうだね」

目に映った黒い鳥を見ながらそう言い。素早く足を念で強化し、壁と壁を蹴って登る。最後に大きく飛び、音もなく着地する。うん、１００点かな。
僕が１番最初のようだ。下を見てみると帰ってきたクモワシに襲撃されていた。下の川に何人も落ちていく。……楽しげに鳥を虐殺して下に落としているのもいるけどね。あ、でもつまらなかったのかすぐに上に登ってきた。

「置いて行くなんてヒドイじゃないか☆」
「飛び降りる時もバラバラだったんだから、上がる時もバラバラでしょ」
「鳥のこと分かってて先に行ったでしょ☆」
「……いや分かってたけど、一々言うことじゃないよね？　ただの鳥だし。雑魚だし。……相手するの面倒だけど」
「僕だってあんな殺しがいのないの狩っても、楽しくないから面

倒なだけ☆」

いや、嬉々として狩ってたよね？　……もしかしてただ絡みたいだけとか？

「はぁ、ごめんごめん」

少し笑いながらそう言った。

「うん☆　元気そうだね☆」

……泣いてたのがばれているみたいです。どうしましょう。なにやら非常に恥ずかしいキガシマス。嬉しい気もするのですガ。あ、これはあれですよね？　“心配してくれてありがとう”と言う場面ですよね……確か。

ああ、と言うより落ち着け僕。なんだか頭の中がおかしいぞ。なんだか頭のなかでの言語がおかしいぞ？

「うん。いつもどうりの方がいい」

イルミさんが僕の頭をナデテイマス。……なんだか、もうダメ。ショートする。この感情には慣れてないからかな？　顔が赤い気がする。

考えるのが面倒になった。恥ずかしいのも嬉しいのも、スルーだスルー。気にしない、気にしない。

とりあえずこの変な気持ちにさせるこの空間から脱出するのが先決だな。

「い、意味分かんないこと言ってないで、早く鍋に行こ！！」

速足で鍋に向かって行く。後ろで二人が微笑んでいる感じがするが無視だ無視！

ふと、いつの間にか溜まっていた負の感情が無くなっているのに気づいた。……試験終わったら二人に何かあげようかな。

情報屋と二次ハンター試験６（後書き）

とある二人の会話。

「さっきヒスイ泣いてたよね？」

「そうだね☆　……入口近くに居たのは、あの最初の試験官だけだったと思うよ☆」

「……殺す」

「良いと思うけど、試験終わってからの方がいいんじゃない？　仕事でライセンスいるんでしょ？」

「終わったら、確実に殺そう」

「ふふふ、僕にも殺らせて（遊ばせて）くれよ☆」

……サトツ絶対絶命！！

情報屋と飛行船と人（前書き）

第３試験に向かう途中の飛行船での出来事

情報屋と飛行船と人

……恥ずかしくて思わず逃げ出してからもう数時間は経とうとしている。あの後無事？すぐに捕まえられた僕は今次の試験会場までの移動のため飛行船に乗っていた。

最初はイルミとヒソカの傍にいたけど、横で変態が危ない感じで笑いだしたので早々に立ち上がり離れる。後ろを見てみれば変態（ヒソカ）はトランプを積み上げては崩し、そのたびに笑いながら悶えていた。

……あんなのと一緒にいたのか。

ちょっぴり、いやかなり一緒に試験を受けにきたことを後悔しながら廊下を進む。しばらく進むと窓際にキルアとゴンが並んで話しているのが見えたので、慌てて廊下の突き当たりの死角に身を潜めた。

窺って見るとどうやら気付かれなかったようだ。ほっと息をついた。

「ところでお前は何の用？」

「ほっほっほ。そう邪険にしなさんな」

勘でそこにいると当たりをつけ話しかければ、案の定そこにいたそいつは飄々《ひょうひょう》とそう言う。この僕がいるのかいないのか微妙な程気配を消して、近寄ってきた人物、ネテロを睨む。

「わざわざ【陰】をして背後から近づいてくる奴を丁寧に扱うわけない。礼を欠いたのはそっち、だろ？」

まったく、こっちはキルアに気付かれないように殺気を消して、気配も殺してるっていうのになんでわざわざ煽りにくるかなこのじじいは。

「おお、それは失礼したの。なに、先程試験官で集まって話をしたときにサトツ君が、君に酷い事を言ったかもしれないと悩んでおったのでな。一応ワシがトップだからの、謝りにきたのじゃよ」

いけしゃあしゃあと、うっとうしい。それだったら普通に静かに近づいて来いよ。わざわざ【陰】をして近づいてくる要素がどこにあるんだ。

「サトツのことは気にしてないよ。当たり前のことを言われただけだしね。――あんたのとこは気にしてるけど」

ヒソカのあの殺気に満ちた笑みを真似る。やけにこいつの行動は気にさわる。

「殺気に満ちているはずなのに殺気を全く感じない。ふむ、本当に稀有な奴じゃな」

「勝手に分析しないでもらえる？」

どいつもこいつも僕を観察し、分析しようとしやがって……。

「しかし、話を聞いて分ったんじゃが、１つ勘違いしておるぞ？」

……？

「お前さんは自分のことを“人”じゃないと思っておるようじゃが、――――――お前さんは“人”だ」

いつ動いたのかなんて自分でもわからない。ただ、いつの間にか僕はネテロの背後に回り込み、等身大程の大きさにした鎌を首に当

てていた。

――――――――こいつは今、なんて言った？　僕が人だと？

「……ふざけるなよ、爺」

静かに、静かに僕の中で燃える。

「ふざけなんておらんよ。心を持ち、人と戯れ、人を愛し、人と一緒におるお主が“人”でないわけがない。逆に聞こうかの。何故、人じゃないと思うのかの？」

自身の中で燃える初めての怒りの業火を押さえるために、奥歯を強く、強く噛む。唇から血が流れる。

痛みと血を流したことで、少し火が小さくなる。

「人ではありえぬ力を持ち。人を殺すのに何も感じず。近しい者を殺したとしても、なに一つ感じないかもしれない僕が。心が壊れた僕が人だと言うのか？　それとも見た目が人型だからか？」

人の定義とはなんだ。

どうすれば人になれる。

寿命があればいいのか。

人型であればいいのか。

心があればいいのか。

――――――人ではない僕にはわからない。

「では人とはなんだ。答えろ人間」

「……そうじゃな。それはとても難しい問いじゃな。ワシは、人だと願う者、人だと自身で思う者が人だと思う」

それが…

「それが貴様の答えか」

鎌を下におろす。

「そうじゃ」

なら……

「僕は人だろうか？」

「ワシの持論ではの」

「体や、能力が人の範囲を越えていても？」

「ああ」

そうか。そういう考え方もあるのか。

「だがの」

優しく呟かれ、顔を上げる。

「それはワシの持論じゃ。誰でも通るものではない。その問いはお前さんの大切な者たちにするといい。ワシの答えより、その者たちの答えの方がお前さんには意味があろう」

イルミやキルア、ゾルディックのみんな。それとヒソカ。

みんなにこの問いを……？

質問する自分と、答えようとするみんなを想像する。頭から冷や水をかけられたかのように、血がさがり震える。

答えが、怖い……！！

「これこれ、そんなに怯えるな。平気じゃよ。なにも今訊けと言っているわけではない。お前さんが訊いても平気なぐらい、勇気と度胸をつけてからでいいんじゃよ」

ぽす、と頭に手を置かれ撫でられる。見上げてみるとこちらを向いき、屈んで僕を見ているネテロがいた。

鎌を向け、殺気を向けた相手なのにその目は優しい。

「……一生できないかも」

少なくとも今はダメぽい。

……こういうのも、甘えてるって言うんだろうな。

「ほっほっほ、焦らずじっくりと時間をかけて心の準備をすればいい。悩め若人」

先程までの殺伐とした重苦しい空気はそこにはもうなかった。

なぜ目の前の人が優しくしてくれるのかも、なぜ今聞いたのかも分からなかった。

でも、なんとなく心のわだかまりがなくなった気がする。

自然に笑みが浮かんでくる。それに逆らわず、ふんわりと笑った。

「ありがとう、ネテロ」

「なに、年寄りが若者の悩みの相談を受けるのは当然のことじゃよ」

――――父親というのは、こんな感じなのかな？

ふ、とそう思っい、なんとなく嬉しくてまた笑ったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9481l/

碧眼の情報屋

2011年6月18日21時28分発行